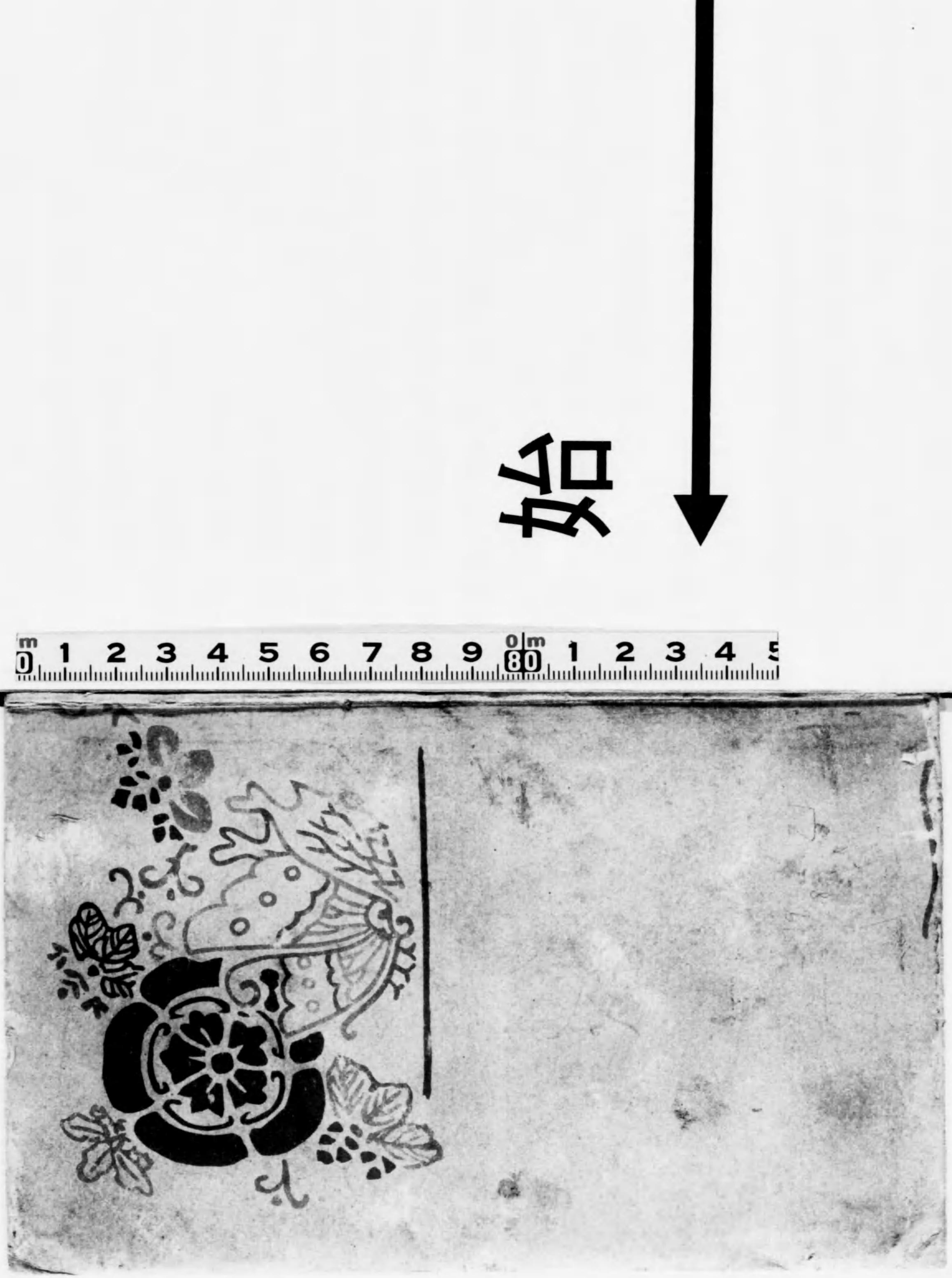
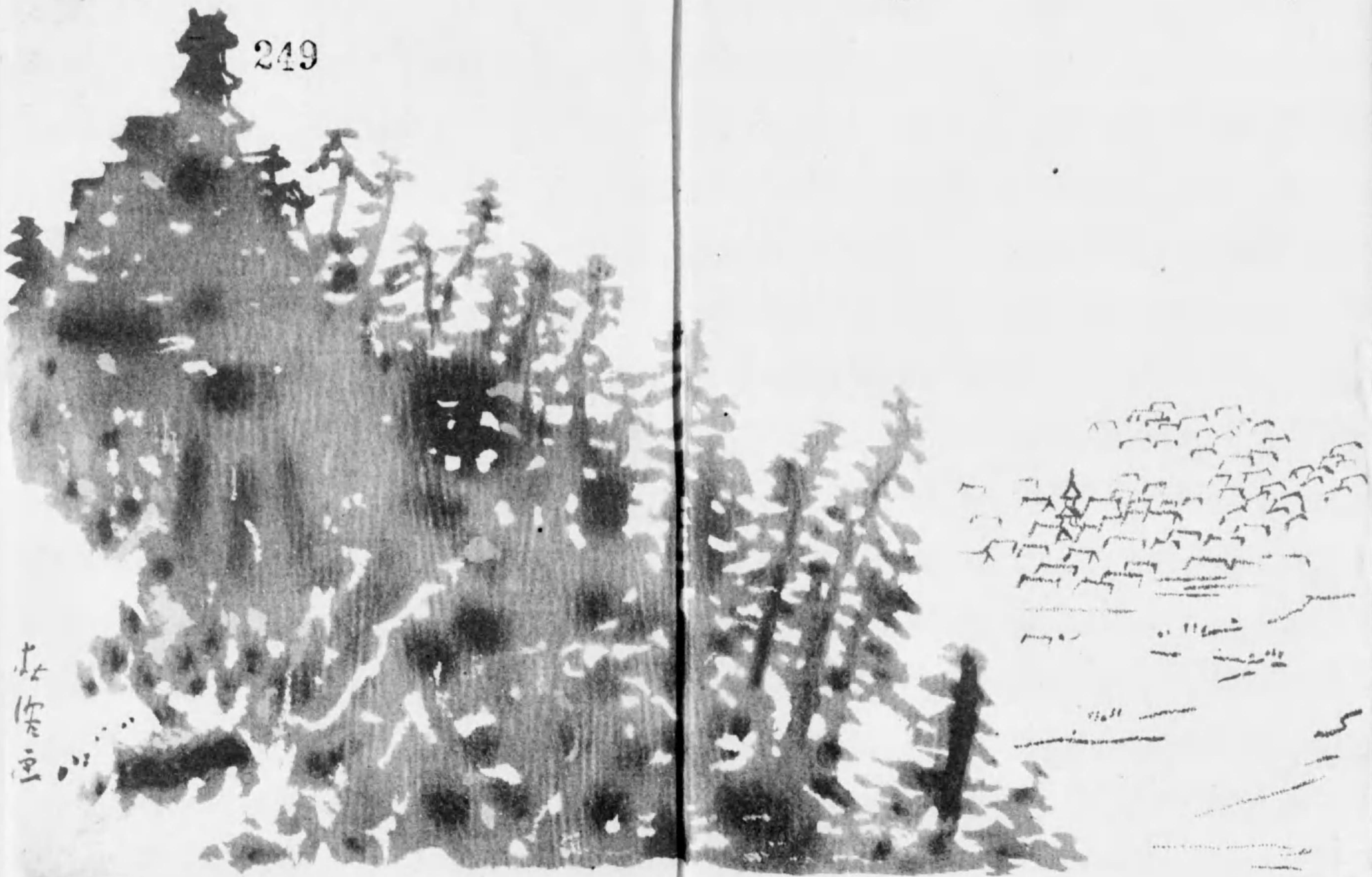




歴史小説
安土・桃山

織田信長

(五)
足利滅亡

鷲尾雨工

織田信長　足利滅亡　第五巻　目次

足利義昭……3
細川と明智……32
小谷訪問……58
江南攻め……92
都入り……122
嵐の前……157

特277
269

151864

金ケ崎退陣……181
姉川合戰……199
反信長聯盟……223
叡山燒打……240
耶蘇教と信長……260
三方ケ原の激戰……289
三河武士……318
巨星墜つ……340
虎御前山……364
十七箇條の諫め……407
足利幕府の滅亡……414
裝幀挿畫……名取春僊

織田信長（第五卷）

足利滅亡

鷲尾雨工

足利義昭

(一)

さて、やうやく足利義昭について語るべき段取りに達した。

だが、義昭を語らうとすれば、勢ひ足利幕府の末路と、京都の政治的支配力とに一瞥を與へなければならない。

足利尊氏が京都に幕府を開いてから永祿年間まで、二百三十餘年將軍の代數にして十三代を經たが八代將軍義政の時、應仁の大亂が起つて、細川勝元軍と、山名宗全軍とが、京都市街を挾んで、東西に對陣することが前後七年間にわたつて以來は、朝廷の儀禮、幕府の作法、すべてが荒廢、地に墮ちてしまつた。

そして、天下は謂はゆる亂麻の有樣で、畿內への七道が、すべて路ふさがり、剛は柔を併せ、强は弱を食み、全國の朝貢は、ことごとく絕え、

長くも、一天萬乘の皇ら宮居も荒るるに委せた。
その亂離骨灰の言語道斷。
澆季の世とは、このためにこそ出來た言葉のやうにさへも思はれたのだつた。
ところが、足利十三代の義輝將軍の時、三好長慶が勢力を得るやうになつてから、京都は稍、ほつとした。

三好長慶は、たしかに、その頃に於ける京畿第一級の人物だつた。大永二年の生れだから武田信玄より一つ若く、信長に比べれば十二歳の年長だ。管領、細川家の家臣の家に生れ、歳二十で、泉州堺の留守居役となつたのは、天文十年だから、信長八歳の時で、德川家康の生れる前の年だつた。

これが出世の振り出しで、十年後の、歳三十の時は、すでに主家細川を壓倒して、殆ど有るか無いかにしてしまひ、自ら山城、攝津河内、大和、和泉、淡路、阿波の七ケ國を領して、將軍家の御相伴衆に經上り、桐の御紋章を下賜されたのみならず、嫡男の義長と、その臣の松永久秀とは、永祿四年すなはち桶挾間戰の翌年にあたるが、從四位下となつた程だ。

もしも三好長慶の健康が、すぐれてゐたなら、京都も一度保ち得た小康を、もつと續けることが出來たであらうに、四十歳になつた彼は、病の床に親んだ。

嫡男、義長は、その器量からいつて、父にも優る傑物だと噂された。

だが、惜むらくは、永祿六年八月、歳二十二で、家臣の怪物、松永久秀のために毒殺されてしまつた。この頃の松永の權勢は、全く隆々として、曾て三好が主家細川を凌いだやうに、下剋上の蒸し返しで、今度は松永が三好を壓倒しさうになつてゐたので、松永の奸計と、鴆毒による謀殺であることは、まるで公然の秘密みたいに風評が洛中、洛外に擴がつた。にもかゝはらず、多少の力の有る者は皆松永の權威を恐れて、そんな噂は聞いても知らぬ顏の半兵衞を極め込んだものだ。

すると、毒殺された義長の父、長慶もまた、翌くる永祿七年七月これも至極變な死に方をしてしまつた。行年四十三歳。

紫野大德寺の聚光院に、眠室進公の塔といふのがある。それは三好長慶の塔だ。

また堺の、龍興山南宗寺は、長慶が建立した寺だ。

長慶死後の京畿は、松永久秀と三好三人衆との、四頭政治が行はれるやうになつた。それは長慶の養子、義繼が、まだ弱年だつたので、一族の三好日向守、三好下野守、岩成主税助の三人が後見役として、松永と四頭政治を採ることになつたのであつた。

義輝は、足利末代の將軍中では一番すぐれてゐた人物であつたらう。將軍職に任じたのは、齡わづかに十一歳。

劍聖、塚原卜傳から學んで、卜傳流の秘奥に達したことは、前にも云つて置いたが、彼が將軍に補任した時は、將軍と幕府の權威はすでに地に墮ちて、近畿兵馬の實權者、三好長慶の勝手我儘を、どうすることも出來なかつた。

で、長慶の生きてゐる間は、隱忍してゐた義輝將軍であつたが、長慶の死後は、やうやくこの長い間の我慢を棄てて、三好・松永一黨の羈絆から脫しようと、いろいろ目論見を立てた。

そんな理由で、京都には、波瀾をふくんだ暗雲が、低く、不氣味に、さまよふのだつた。そして義輝・對・松永彈正の反目は、日に日にひどくなつて行つた。

ちやうど室町御所が、修繕の普請最中だつた。進藤山城守や、松永主殿助が、奉行人であつたが、彈正は、この柳營の修理が出來上らないうちに、不意討ちに襲はうと考へた。

永祿八年の五月十九日、松永彈正久秀は、(今日こそ！　あの强がりの痩せ將軍に引導を、渡してやらう)

と、思つた。

『清水詣』

さう、披露して、人數を集め、

『公方家へ、御訴訟申上ぐる事あり』

と、進士美作守晴舍を擧して、訴狀を捧げさせて、室町御所の中へ入れた。だから、御所方は一層油斷した。その間に、三好一黨の諸兵が、四方の土居を踏み越えてみな一樣に竹の葉を相印に鬨してどつと鬨をつくつて、鐵砲を――「ダ、ダ、ダツ、ダアーン」と釣瓶打ちに、ぶつぱなし、漂々たる煙の下から、喚き叫んで、殿中へ亂れ入つた。

松永彈正の兵は、ひた押しに奥の館、將軍座所を目掛けて、闖入した。

折ふし、御所には何の備へもなかつた。ほんの當番の士が數十名居合せたのみ、その他は女と下人共だけであつた。

この日の當直衆、一色淡路守、有間源次郎、一色又三郎秋成、上野兵部少輔輝清、同じく與八郎、結城主膳正、高伊豫守師宣、彥部雅樂頭晴直、その弟の孫四郎、高木右近大夫などが斬つて出て、防ぎ戰つた。

進士美作は、

『只今、敵に騙かられ、無念の御使仕りましたる儀、口惜しとも口惜し。せめても御申譯の爲、眞ツ此の通り、腹切つて――』

と、悲痛な面持ちで、詫び腹を將軍の前で、掻き切つたのである。

將軍側近の小姓、大館岩千代、十五歳。畠山九郎、十四歳。華々しく敵の中へ躍り込んで、斬り結んだ。

攝津糸千代丸十三歳。後れじとばかり雄々しくも、群がる敵の双の中へ、跳び込んで行つた。

將軍が「五月雨は露か涙か時鳥」の辭世を詠んだのは、この時だつた。

義輝將軍は、阿修羅のやうに奮闘力戰、自ら二十數人の敵を斃し、數十名に手を負はせたが、つひに池田丹後守の槍に内腿を刺されて仆れたところを、戸障子を倒し掛けられて、その上からまたも突かれたので、力が盡きた。

丹後は首を取らうとした。だが、その時、猛火の舌先が、メラ〳〵と燃え近づいて、義輝將軍の體を炎の中に押し包んでしまつた。

丹後は炎に嘗められ、煙に卷かれたため、大火傷をして、昏倒したのだつた。

(三)

栗津仙千代十二歳、畠山九郎十四歳、大館岩千代十五歳——蕾の花ながら、さすが劍豪、義輝御所

の昵近の小姓だけに、歳若くとも腕に覺えの劍さばき！　亂双、また亂双のその間に、いとも健氣に斬り死を遂げたのであつた。

この日の室町御所の、側近の働きは、あまり世上に知られてゐない。だが實に壯烈、義勇、人をして哭かしむるものがあつた。

將軍の母君、慶壽院殿は、近衛殿下、稙家公の息女であつたが、炎々たる猛火の中へ、自ら身を投げて、亡き數に遣入つた。

死出の旅路に御供した侍女は、その數三十一人と聞えた。

昵近の名ある侍で、生き殘つた者は、ただの一人も無かつた。

足利幕府は、時運とともに頽廢したけれど、誰れか君臣の誼、おとろへたと云へよう！

御所から逃げ出したのは、ただ獨り將軍夫人のみであつた。これも近衛家の姫君であつたが、ポルトガルの宣教師の報告によれば、

『三日を經て、京都の郊外、半里ばかりの、佛僧の閑室に、潛居せるを探し出した。逆徒の二將、二卒を遣りて、これを斬らしめた。夫人、時に歳二十七。その容姿、艶麗、儀容は端正、慈愛深く、勇氣の逞しさ、男子にも優り、いかなる高き位につくとも恥ぢざる女丈夫であつた』

と、ある。

だが、それ程の女丈夫ならば、天下の武將、武門の棟梁たる、義輝の御臺所として、しかも自分の叔母であり、姑である慶壽院さへもが、火に投じて自ら死んだにも拘らず、何を目的として、洛外の寺院に遁れたか。

だが、そんな詮議は、ここでの主題ではない。

將軍義輝に、弟があつた。奈良一乘院の門跡、覺慶がその人だ。

『いかが致したものかのう？』

と、杖とも柱とも思ふ、細川藤孝に向つて云つた。

藤孝は、三好一黨のために、滅ぼされたも同樣な、管領、細川のあとで、宗家足利のためには、殆どただ一人殘つた重臣であつた。重臣といふよりは、最も重んぜらるべき分家の一人であつた。

彼、藤孝は、畏くも　帝王の和歌の師父たりし一代の文學巨匠だつた。のみならず、弓矢をとつても又、人後に落ちない英材だつた。

『まことに、足利お家の浮沈——お心を、毅々しうお持ちあそばせ。すでに北山、鹿苑寺の周高樣は無殘にも、お斬られなされましたこのままでは、おそらく、御命も覺束なう御座るが、兎も角も、身共にお任せ下さりませ。宗家のため、この藤孝、身を粉にしてもお護り仕らうず』

藤孝は、一計を案じて、監禁の覺慶僧都を見張つてゐる守衛兵に向ひ、

『覺慶樣には、俄に烈しい御腹痛ぢや、典藥、米田宗賢を召せとの御意ぢや。早う』

と、云つた。

これは假病であつた。

典藥が來ると、暫くして藤孝は、

『容易ならぬ御容體ぢや。御苦勞ながら、その方ども、今宵は眠らずに居てもらひたい。代りには存分に酒飲まさう。遠慮なく、飲みながら明かして呉れい』

さう、眞しやかに賴んだのであつた。

（四）

細川藤孝は、とくと談合せをすませて、守衛の兵どもの醉ひ知れた一乘院を出て、暗い夜路を、春日山の方へ行くのだつた。

酒を鱈腹、喰はされた番兵らはすつかり油斷してゐた間に、醫師の宗賢は、

『いざ此の隙に！』

と、覺慶を誘つて、庭へ出た。そして自分の背中に、數奇な運命に弄ばれつつある貴種の僧侶を

背負つて、院の周圍の高塀を、乗り越えたのである。

その力の強さ、その身の輕やかさ！

米田宗賢は、醫術を以つて勝れてゐたのみならず、武藝と、力量に於いても人並々ではなかつた。

ただに、僧、覺慶を背負つただけでなしに、覺慶の乳母を、小脇に抱きかかへて、塀を越えたのだつた。

（おう！）

何といふ力の強い人であらうと背中の僧も、抱かれた乳母も、夢心地の中ながら、驚きに舌を卷かずにはゐられなかつた。

覺慶は、宗賢の強力を頼もしく思ふにつけても、この男を、かうして働かして呉れる細川藤孝が、今更のやうに有り難かつた。

やがて、覺慶は、春日山まで運ばれた。

山には、先廻りをしてゐた藤孝が、有吉將監以下二十名ほどの家來と共に、待つてゐた。

あたりは五月闇、折ふし人の行きも杜絶えて、郭公の聲、しきりに啼き渡つた。

そこで、覺慶は、一首の和歌を詠じた。

郭公なくや五月の山中に　　おのが古巣の名殘をしみて

同じ兄弟ながらも、この弟に、將軍義輝のやうな兄のあつたのも思へば不思議だつた。兄は豪勇絶倫、新當流の秘劍を揮つて、群がる松永兵を薙ぎ倒し、池田丹後に戸障子で、押し詰められつゝも首を渡さなかつたくらゐ、壯烈に死鬪したといふのに、この弟は、いかに佛門に入つた身とはいへ人の背に負はれて逃げ出したのである。

剛と、柔とが、あまりにも隔たりすぎる。

玉水についたのは曉近かつた。

藤孝はまづ、近江、甲賀郡の和田和泉守秀盛の邸に、覺慶を案内した。

そして、さらに中郡、矢島の和田伊賀守惟政を頼つた。

覺慶は、虎口を遁れた。

だが、和田は、蒲生の支流で、小大名でしかなかつた。藤孝は、松永の毒牙から、覺慶を免れさせるための、ほんの足溜りとしてこの和田を頼つたまでで、足利幕府再興の大望を、託するに足る人と和田を見なしたわけではなかつた。

そこで、覺慶と藤孝とは、間もなく、江南の大守たる、觀音寺山の六角承禎に身を託した。

覺慶が還俗して、名を義秋としたのは、この時だ。

で、足利義秋の名で、遠く越後の上杉謙信などへも、手紙を送つて、援助を請うた。

幕府を再興して、義秋を將軍職に据ゑよう、とさう考へる者共も追々と、この觀音寺山の假寓に集まつてくるのだつた。

義秋こそは、後に名を義昭と改めて、足利の最後の將軍となることの出來た人だ。彼をさうさせたのは、偏に細川藤孝の力だつたが、さて、この藤孝なる人物は、どんな生ひ立ちだつたらう？

藤孝は、管領細川家の當主ではあつたが、實は足利十二代將軍、義晴の落胤だつた。

（五）

藤孝といへば、あゝ細川幽齋かと、誰も頷くだらう。

畏くも、帝王の御師範として、神道・和歌の國師と仰がれた幽齋玄旨、從二位法印の高位に昇ることになる人だ。そして有名な細川忠興の父だ。

この藤孝は、義晴將軍の落胤であるから、松永に殺された義輝將軍と、覺慶から還俗した義秋の二人にとつては、實の兄に當るのである。

細川藤孝が、歌道の大家であることは、何人も知つてゐようが、義輝將軍や、後の義昭將軍の實兄だといふことは、あまり知られてはゐないやうだ。

だから、いささか藤孝ノ生ひ立ちに就いて語るのも、決して徒爾ではあるまい。

足利十二代將軍、義晴がまだ、若かつた時、少納言清原宣賢の姫を、側室に納れて、これを愛した。

やがて姫が、懐姙した。

ところが、恰度そのとき、

後奈良院の勅命に依つて、近衛尚道の姫を、將軍の正室に賜はることになつた。

義晴將軍は、恐懼措くところを知らず、すでに姙娠してゐた姫、清原氏を、そのまま三淵伊賀守晴員に與へた。

『腹の兒が、もしも男子ならば、そなたの世嗣にせよ』

と、將軍が、三淵に云つた。

三淵は承はつて、身籠つてゐる姫を、京都東山の麓、岡崎の別莊に住まはせ、沼田上野介光兼と築山彌十郎貞俊を附けて、大切に取り賄はせた。

ほどなく、月日滿ちて、天文三年四月二十二日、男子誕生。

父母——即ち、三淵晴員と清原の姫との悦び、一方ならず、生れた子の名をも、萬吉と名づけて、それはもう大層な寵愛だつた。

この萬吉が、藤孝だ。

萬吉は、五歳で、初めて實父の義晴將軍に、謁した。その折に、養父の三淵が、

『拙者は、小身者で御座ります故このお子を、養ひまするには、誠に分不相應かと存じまする。しかるべき大家の、繼嗣となされましては、如何のもので御座りませうや？』

と、云つた。

將軍は、さう云はれて見れば、道理だ、と思つた。

それで、萬吉は、細川播磨守元常の養子、といふことになつた。

三淵は、足利三代將軍、義滿から別れた分家で、山城の國、三淵の邑に領地があつた爲、それを姓とするやうになつたのだ。泉州松ケ崎の城主だつたが、晴員自身の云ふ通り、小身であつた。

ところが、細川家は、謂ふまでもなく、管領の家系で、足利の同族中では、一番の名家だつたし、大身でもあつた。

けだし、萬吉が、細川家の世嗣となつたことは、當然だといへる。

天文三年生れといへば、甲午生れだから、萬吉は、織田信長と同い年だ。

天文十五年十二月、將軍義晴の長男菊童丸が、十一歳で坂本の日吉神社で元服して、義藤と名乘つた。義藤は後に名を、義輝と改めるのであるが、この時は義藤の名で、父の將軍職を襲いで、十三代將軍となつたのだ。この元服の時は、庶兄に當る細川萬吉は、年十三歳。これも同時に同じ場所で、

元服して、細川與一郎藤孝と稱した。

そして、十一歳の若き將軍、義藤の、近習・兼・申次役を勤めた。

（六）

若き將軍義藤は、劍術は天才だった。

だが、文學も巧者だった。

香もなく香もなく道のいたれるは　ただそのままの有明の月

と、詠んだものだ。

これに對して、文學、歌道において、一世に鳴らした藤孝は、

つつしみのうやうやしきは人の人　たつとまれぬる敬ひの門

と、詠じた。

どちらも、實に佳い歌である。

天文十六年、藤孝十四歳の時、細川の家臣だった三好長慶が、すでに強大な權勢を得て、叛亂を起し、將軍義藤とその父義晴とを、俄に攻めた。

將軍父子は、細川元常、藤孝に護られて、危難を、近江の坂本に避けた。
やがて、和睦が成つて、將軍父子は、京都に歸ることが出來たけれども、天文十八年、長慶はまたも叛いて、再び將軍父子を、都から追ひ出した。
藤孝は、この時も、護衛につとめて、神樂ケ岡から、近江に走り如意ケ嶽に一城を築いて、そこへ移らうとしてゐる間に、前將軍義晴、すなはち彼、藤孝の實父は、穴太の山の中で、病のために薨じてしまつた。
藤孝は、將軍を叡山の寶泉寺に移して、自分は三好勢と對戰した。
文學に於ける若き天才、藤孝は劍を把つて、兵を動かすことにかけても、また卓拔な武人だつた。
しかし、當時はもはや、細川管領家は、昔日の勢力の、面影さへもなかつた。なぜかといへば、曾ては自家の臣だつた三好長慶のために、さしも廣大であつた細川の領國は、ほとんど全部うばひ取られてゐた。
先祖以來の領地といへば、阿波、讃岐、伊豫、土佐、播磨、備前、備後、和泉、攝津の九ケ國に及んでゐたのであるが、三好一黨のために、すべて掠奪されて、殘るところは、わづかに山城の、勝龍寺の一郭、三千貫の狹い場所のみとなつてしまつてゐた。
全く、お話にならぬほどの衰へ方だ。

九ケ國から、たつた一郡の何分の一かの、三千貫に細つてしまつては、どれほど藤孝が英材でも、何とも致し方がなかつた。
僅かな兵力では、三好の大軍に對して、どう五角の戰が出來よう。
藤孝の青年時代は、ほんたうに受難、苦鬪の連續だつた。
いくたび京都に戻つては、いくたび京都を棄てなければならなかつたか、
長い間、近江の朽木谷に、難を將軍と共に避けてゐた。さうした流離、轉顚の境遇にあつて、その身の置き所も、定まらぬやうな時にすら、だが藤孝は、勤學の志を斷たなかつた。
哀切、ひし〳〵と迫る夜、靜かに更けるのを待つて、必ず讀書三昧に耽つた。
しかしながら、久しい流離も、やうやく終りを告げて、永祿元年藤孝二十五歳の時、將軍義藤は、三好一黨との講和が、本當に出來て、歸京した。義藤が、義輝と改名したのは、この時だつた。
藤孝が、從五位下、兵部大輔に叙せられたのは、二十歳の時だつたが、この時、將軍奏者役となり永祿六年、歳三十で、長男熊千代を、京都一條の館で、儲けた。
これが後年の忠興だ。
熊千代の母は、沼田上野介光兼の娘で、名は麝香といつた。

熊千代の生れた翌年、永祿七年は、藤孝三十一歳。この年の秋、將軍義輝の母堂、近衛慶壽院が、伊勢大神宮に、立願の事があつて參詣した。藤孝は、その供をして伊勢に詣で、二見ケ浦を經て京都へ戻つた。

これは恰度、尾張の信長が、美濃稻葉山を攻め落して、城下町を岐阜と改稱した時と、ほとんど同時だつた。

藤孝は心のうちで、

（上杉謙信は、關東管領として、越後から東國一帶に、威勢を張つてゐるし、長曾我部元親は、土佐から興つて、いまや四國の大半を自分のものにしかけてゐるし、毛利元就は防長に據つて、力を上國に伸さうとする形だ。近畿を壟斷した三好、松永の一黨は、早晩これらの勢力と衝突するであらうが、その時こそ足利幕府再興の機會を捉へなければなるまい。だが、それを捉へるには、いまのやうな、ただ落莫たる非力な、名ばかりの、位だふれの身であつて怎うする？）

と、苦慮に苦慮を、重ねるのであつた。

けれども、藤孝の苦心は、哀れにも、水の泡と消えた。

松永の毒手は、つひに室町御所を襲うて、將軍義輝を弑した。

この時、藤孝は、自分の城、勝龍寺城にゐたのであるが、變を聞いて、側近の家士二十八騎と共に眞ツしぐらに洛中へ走つけた。

だが、遲かつた。

將軍も、母堂慶壽院も、すでに斃じて、骸は猛火に燒かれた後だつた。これが永祿八年五月十九日異變後、將軍の弟、僧覺慶を、南都の一乘院から救ひ出して、近江へ奔つたことは、前に述べた通りだ。

最初に賴つた和田は、小大名だつたので、觀音寺山の大守、六角承禎に救ひを求めた。

ところが、この頃、承禎は、嫡男の右衛門督義弼と仲たがひをして、江南の名家、近江源氏、佐々木の勢力も、これまた昔ほどの勢威がなかつた。

のみならず、若の右衛門督は、窃に三好、松永一黨に內通して、父承禎の側に、假寓してゐる覺慶還俗の義秋を、捕虜にしようと目論んだ。

義秋と、藤孝の身邊に、危險の迫つたのは永祿十年八月であつた。

『湖水を渡つて、若狹へ、お遁れあそばす他、御座りますまいぞ』

と、藤孝が奬めた。

若狭の國守、武田大膳大夫義統は、藤孝の妹婿であつた。また、藤孝と共に、義秋を護つて、艱難をつづけて來た沼田光兼の領地も若狭にはあつたのである。

月明らかな十五日の夜、つひに若狭をさして、湖水渡りの、逃避行となつた。

主從わづかに十人だ。

しかし倖ひにも、船は無事に、湖心に浮んだ。

時しも中秋。

皎々と月明は、落ちてゆく主從の悲痛な顏を照らした。

その時、義秋が一詩を賦して、

江湖に落魄して
暗く愁ひを結び
孤舟の一夜
思ひ悠々
天公もまた
吾生を慰むるや

と、詠じたのであつた。

月白く蘆花
淺水の秋

（八）

義秋が、漂泊流轉の情を、七言の絶句に賦すと、舟中、かたはらにゐた藤孝は、直ぐに一首の和歌で、その風韻に應へた。

よるべなき身となりぬれば汐ならぬ　湖の面にもうきめ見るかな

若狭の武田義統は、期待に背かなかつた。

懇ろに、本城に迎へ入れて、心を盡して、もてなし仕へた。

だが、若狭は、極めて國が小さく、兵力が弱いので、むろん京都回復のことなどは、思ひも寄らなかつた。

要するに、危險から免れるための逃避でしかなかつた。

（越前の朝倉を頼らう。朝倉ならば國力も強いし、將軍家への忠誠も篤い家柄だ）

藤孝は、さう思つて、武田義統とも、この事に就いて諒解を遂げた。

そも〳〵朝倉家は、およそ九十年前、文明年間に、敏景が、越前の守護職に任ぜられて以來、幕府のお供衆に列せられたり、あるひは御相伴衆に准ぜられたりして、白い傘袋や、虎の皮の鞍覆を許されたり、さらに踏輿、免許までも有つたほどの家筋で、今の當主の信景は、義輝將軍から一字を賜はつて、義景と改めてゐた。

で、京都回復の立脚地としては、この越前にかぎると考へた藤孝は、まづ金ケ崎に行つて、朝倉景紀を説いて、景紀から大守の義景の承諾を得たのであつた。

そこで改めて、一乘谷の朝倉本城に赴いて、藤孝は大守に對面した。

相談が整つたので、若狹へ戻つた藤孝は、やがて、義秋を導いて一乘谷へ行くと、朝倉は、まづ、安養禪寺を旅館と定めて、待遇に心を盡し、その後あたらしく居館を造營して、義秋を住はせ、公方と尊稱して、自ら臣禮をとつた。

新館へ移つた時は、ちやうど庭の牡丹の、花盛りであつたので、藤孝は、朝倉から、發句を所望された。

で、一句。

移し植は千代の根ざしやふかみ草

と、詠んだ。

新館への移轉と、根ざしふかい牡丹の花と、それに朝倉の懇情の深さをかけて詠んだものである。

間もなく義秋は、名を義昭と改めた。

「公方、義昭公、一乘谷に在す」

檄文が、四方に發せられた。

志を寄せる者共を、集めるためだつた。

集まる兵三千餘人。

朝倉には、總勢二萬の兵力があつた。

そこで、新募の兵をも合せると二萬三千七百餘人。永祿十一年六月十三日を期して、京都回復のために、いよ〳〵出陣、といふ事に決まつたのであつたが、このことを聞いた加賀・能登・越中三ケ國の一向宗徒は、前々から朝倉を、深く恨んでゐたので、

『好機、ござんなれ！』

と、手ぐすね引いて、朝倉が大擧して上洛軍を進めるならば、その虛に乘じて、越前へ侵入しようと計畫した。

（困つたことになつた。大坂へ行つて、顯如上人に、すがつて見よう）

さう、藤孝は思案して、微行で大坂まで出かけて行つて、そして本願寺の顯如上人に面會した。

『どうぞ、上人のお力で、加能越三國の御門徒衆を、おなだめ下さりませぬか』

と、藤孝は、眞心こめた願方をしたのだつた。

（九）

北國筋は、本願寺の、大切な根據地の一つだつた。

一向念佛の信仰が、民衆の心に深い根差しを持つてゐて、支配階級である武士、武門も、この眞宗に對する强烈な信仰を、度外視しては、とても勢力を張ることが出來なかつた。で、加能越三國の一向宗徒の勢ひといふものは、侮りがたい力だつた。現に、朝倉の上洛を妨げようとして彼等の惣勢は武器も碌に持たない土民の頭數をも加へての事だが、無慮八萬人と聞えた。

八萬人に侵入されては、越前も堪つたものでない。

藤孝が、本願寺の法主、顯如上人の聲がかりで、この一向宗勢力の侵入を、阻まうと考へたのは、いかにも尤もな思案だつた。

上人に向つて、藤孝は、

『もしも、御肝煎りを以ちまして和睦の儀が叶ひまするならば、朝倉の姫を、御世嗣、敎如樣の御妻方に差上げ、末長く御法燈に對し二心無き志を、表明いたさせまするが、如何に御座りませうや？』

と、云つた。

この提案を、顯如上人は、承諾した。

約束が出來たので、藤孝は、一乘谷の朝倉本城に戻つて、この事を義景に告げた。

大坂の本願寺からは、約束通り加賀の金澤別院へ、朝倉と和睦すべき事をいつて寄越した。

そこで、後ろを衝かれる心配もなくなつたので、藤孝は、

『いよ〳〵京都へ、進發されでは如何？』

と、度々、義景を促した。

だが、たま〳〵義景の愛子、阿若丸が病死した爲、義景の悲しみが異常に深く、見るも痛ましい程に、氣力が沮喪してしまつた。

全く、桁外れの、悼み方だつた。

藤孝は、

『親として、子の短命を嘆くのは人情の道理ながら、返らぬ事を、際限なしに悲しまるゝは、あまりにも女々しうは御座らぬか』

さう、義景を、窘めたのであつたが、何の効もなく、やがて義景は、人と顔を合せることをさへ厭ふやうになつた。

（腑甲斐ない！）

藤孝は、幻滅を感じた。

（聞くと、見るとでは、かうも違ふものか）

朝倉義景は、大國の主として、頼むに足る人物だと聞いてゐたのに、これはまた何といふ阿呆人であらう。

（越前に身を寄せたのは、とんでもない誤りだつた。京都回復はおろか、こんな事では、越前一國を保つことさへ、覚束なからう。かやうな所に長居は無用ぢや）

藤孝は、落膽した義昭を、宥めすかして、他に頼るべき場所と、人とを、心のうちに物色するのだつた。

朝倉義景も、實は、一子の病死を、これ程までに悲嘆して、人との對話を避けるといふやうな暗愚な性質ではなかつたのであるが、恰度この頃は、猛烈な神經衰弱症にかゝつてゐた。

（こんな筈では無かつたのだが――）

筈がなくても、現實がこれでは怎うにも成らない。藤孝は、自分の錯誤と、不明とを悔いた。

だが、その錯誤は、決して、藤孝の罪ではなかつた。彼の不明のために、義昭を越前まで導いて來たのではなかつた。朝倉を頼つて京都回復を圖つたことには、充分な理由があつたのである。

では、その理由とは？

細川と明智

（一）

もう十年あまり前のことだがまだ、美濃稲葉山の、齋藤道三のこの世にあつた時の話だ。諸國武者修業の長い旅から、甥の明智光秀が歸つた折、

『つまり、義龍は、信長を怖れはじめたのだ。予に刄向へば、信長と闘はねばならぬからな』

さう云ふと、光秀は、不快な面持ちで、眼を瞑つて、腹の中で、

（虎が猫の眞似をしてゐるのだ）

と、思つた、そして道三が、

『予の婿、信長は不世出の英雄だ』

と呟くと、光秀は顏色を變へて、

『拙者を――拙者を、愚弄なさるのかッ！』

と、叫んだものだ。

當時、光秀は、自分の伯父、齋藤道三の女婿である信長を、

（寒中も素ッ裸で、裸馬に乘るほか藝なしの男）

と、しか思はなかつた。

道三が滅びた時、その夫人の實家である明智家もまた、義龍の軍勢に攻められて、居城、惠那郡明智城もまた、陷落した。そこで、光秀は、いづれへか身を寄せなければならぬ流浪の境涯となつて、數年間、旅から旅を經巡つて、仕官を求めた。だが、光秀が、これはと思ふやうな主人には巡り會はなかつた。

（織田へ行きさへすれば、夫人の濃姫は自分とは肉親の從兄妹だし自分ほどの材幹と、素養と、經驗とがあれば、勿論、重く用ひられるに違ひない）

さうは思ひながらも、信長の若い頃からの人柄を思ふと、とても行く氣にはなれなかつた。

光秀が、織田に仕官せずに、越前の朝倉に仕へるやうに成つたのは、性格的に信長とは、全く相容れない爲の、反感からでもあつたが、しかし、文武兩道の達人である光秀が、越前に行つたといふ事は――卽ち、朝倉義景を、主君に選んだといふ事は、かなり朝倉が、他の諸侯よりも傑出してゐたことの證據でなければならない。

この事は、また細川藤孝くらゐに優秀な人物が、やはり朝倉を頼つて、宗家であり、主君である足利の再興と、京都の回復とを、畫策したのでもわかる。

たしかに、足利義昭と、細川藤孝とが、朝倉を頼つたのは、朝倉の勢力と、その當主、義景の人物が、相當以上なものであつたことを裏書きするものだ。

だが、藤孝は、自分の依頼心があまりにも見當ちがひだつたので、

『この花も、長うは無いと思はれるが？』

と、櫻の梢を、仰き見ながら、云つた。

それは南陽寺の、櫻の宴の最中だつた。

『この花が？』

と、光秀が、梢の花と、藤孝の顔とを見くらべた。

藤孝と、光秀とは、酒宴の席を外して、花の下を歩いてゐた。

『左様。——この花がちや』

ちいつと、對者の瞳を見入りつゝ足を停めると、

『はて、散るには早い櫻の花を？』

光秀は、重ねて問き返した。

この春は、四十三歳。

藤孝よりも、八つ年長だ。

四千五百貫といふ知行を食んで、朝倉家では押しも押されもせぬ、立派な身分だつた。

（二）

『花はいま、盛りと見えたのは、僻目で御座つた』

さう、云つたのは、藤孝だつた。

光秀は、四邊を、ぐるりと見廻してから、

『花に譬へて、當家、朝倉殿を？』

訊ね顔を向けると、藤孝は、頷いた。

見しや玉簾
内ぞ床しき
思ひづま
引くな唐猫

網にまかせて
追ひ風
と、聞えてくる、都ぶりの歌聲。
囃子の笛太鼓。
殿中は、遊興の最中。
『のう、明智殿。お身も僻目、自分も僻目。ともに、見誤つた。見損ねて、お身は、仕官を、こゝ朝倉に求め、また自分も上様を護つて、庇護ひの樹かげを、こゝに探し出した。けれども、朝倉殿は、お身の主としては、餘りにも不足すぎた。そして上様の、お宿りなされた樹かげには、雨が漏らうぞ——遠からず、身共は、他の木陰へ移らうと存ずるが、いかゞ覺す?』
光秀とは、まだ日の淺い交際だつたにも拘らず、もう心の奥底から、互に許し合ふ仲となつてゐた藤孝は、言葉を續けて、
『朝倉が、この越前の國に根を張つてから、二百十餘年、北陸に輝かした、その武威も、宗滴の死後は、全くにはかに衰へて、義景殿の文弱を、誅めようとする者が一族にもなく、また家臣にもない。されば、もはや長からぬ北國の花ぢや』
『おゝ、藤孝殿までが、左程に!』

『いかにも、身共までが、朝倉義景は文弱なりといはざるを得ないとは、のう!』
藤孝は、慨かはしさうに、太息を洩らした。
朝倉義景は、今年三十六歳。藤孝よりは、一つ年が多かつた。そして義景の夫人は、藤孝の同族で本家筋にあたる細川晴元の姫であつたし、さうした親戚關係だけでなしに、文學・歌道の上でも、最も親い間柄だつた。
と、いふのは、歌學の名家、二條淨光院から、藤孝も、義景も、共に『古今集傳授』を得て、敷島の道の奥儀を極めてゐたからであつた。
藤孝が、越前を頼つたのは、さうした親密關係に依るものであつたが、藤孝自身が、文のみならず武にも心を用ひたのとは大違ひで義景は、彼の祖父の貞景このかた三代にわたつて、越前の武威を、重からしめた一族の長者、朝倉宗滴が、病死してからは、たゞ驕奢に流れて、一乘谷の城の館には、京都の柔弱を移し入れ、美女嬪女を集めて、酒食におぼれ、兵馬を忘れ果てゝ、歌枕を、三里濱に訪ねたり、安波加河原に、曲水の宴を催したり、まるで武家生活から緣遠い、大官人のやうな氣分にばかり、浸つてゐたのだつた。
艱難は人を磨く。義景の境遇——越前の環境は、あまり安逸すぎた。
西隣、若狹の武田とは、姻戚つゞきだつたし、南隣の近江の淺井とは、久しい攻守同盟を結んで

わたし、東隣の、美濃の齋藤とは、これも親善な關係にあつた。
で、北の加賀だけが、一向宗の勢力地で、時々、戰つたといふだけ——
戰國には珍しく、越前は平和だつたのである。

（三）

富陽寺觀櫻の宴から、數日後のことであつた。
明智光秀は、極く少數の從者をつれて、美濃の國に現れた。
越前は北國、美濃は、白山山脈の南である。たつた一脈の山々に隔てられてゐるだけではあるけれども、この南北の相違は、春の遲い早いを、はつきりと感じさせた。
越前の花は、やつと散り初めた位なのに、美濃はすでに、若葉青葉の葉櫻であつた。
光秀は、岐阜の、千疊臺の館を訪れて、信長の北の方、濃姫夫人に面會を求めた。
濃姫夫人は、光秀が、會ひに來たと聞いて、
（何事であらう？）
ちよつと考へただけでは、全く察見が、つかなかつた。

（從兄妹同士の幼馴染といつても今ではもう、あかの他人よりも疎々しいものを？）
と、思つたが、會ふのを、拒むといふ理由も見つからなかつた。會つた方がいゝか怎うかを、夫の信長に訊ねるほどの事でもないと、考へられたので、使番の侍女に、
（小書院で會ひませう）
と、答へた。
侍女が退ると、夫人は、
（怎んな人柄に、おなりだらう？　十兵衛どのとは、もう何年、會はないことやら？）
指折り數へて見ると——
（まアあ、二十七年ぶりかしら？）
さうだ。まさしく二十七年ぶりの再會なのであつた。
光秀が、明智城から、諸國武者修業に旅立つたのは、彼の青春十六歲の時であつた。
（あの折の、わたしの歲は十一）
もしも、光秀の武者修業が、五年か、六年で、終つたなら、おそらく濃姫は、光秀の妻となつたであらう。なぜかなら、濃姫の母は實家の甥の光秀を、非常に賴もしく思つてゐたし、父齋藤道三は光秀に對しては、軍學・兵法ならびに槍術の最初の師匠で、しかも光秀の勝れた器量を、深く認識し

てゐたからであつた。

道三は、殆ど口ぐせのやうに、

『彼は、天才ぢや。將來に、天下に名を成すに違ひない傑物だ』

と、云つてゐたし、ほろ酔ひ機嫌の戯れ言葉に、

『從兄妹添ひは、鴨の味がすると云ふぞよ。濃姫わツはははゝゝ』

などゝ、春まだ淺い愛姫を、心よささうに弄かふこともあつた程だ。

さうした間柄の、濃姫と光秀ではあつたけれど、運命は二人を、相見ることなしに分け隔てた。

光秀は十六年間も、他國の旅で暮した。その間に濃姫は、尾張へ輿入れをして信長の妻となつた。

それからも、たゞの一度も相見ることなしに、今年は濃姫夫人が三十八歳。光秀はすでに四十三歳であつた。

寶にも人の世の離合こそは、數奇な操つりの糸に、左右される！

濃姫夫人の心は、再び、

（十一の歳から、二十七年ぶりの邂逅！）

と呟くのであつた。

自分の居間から、小書院へ行く廊下を、歩きながらも彼女は、さながら泉のやうに湧く追憶に、浸

つた。

（四）

廊下を歩きながら、濃姫は、光秀の現在の風貌を、どんなであらうかと想像した。

だが、浮ぶのは、昔の、どちらかといへば痩せぎすな體格と、神經質な眼鼻立ちの、少年時代から青年へ移る頃の光秀であつた。

入口で、侍女を去らせて、小書院へ這入ると、

『おゝ！』

そこには、心に浮んだ容貌とはまるで似ても似つかぬ、髪の毛の薄い、額の赤茶色に禿げた、頭のてつぺんが、てらてらと光るやうな、四十三にしては酷く老けた光秀が、坐つてゐた。

そして、重厚な表情で、おもむろに會釈をした光秀が、

『お珍しや、濃姫どの。一別以來幾十星霜。——旭日昇天の勢ひある織田殿の、御内方としてお榮えの麗しき御機嫌、今ぞ、まみえて光秀、恭悦至極！』

と、いとも慇懃な、切口上で挨拶されたので、濃姫夫人は、

（あらまあ！）

と、いさゝか間誤ついた。

あまりにも、夫信長とは、感觸が違ひすぎたからである。

むろん彼女にしても、自分の夫に、幾分でも似た光秀に、出會はうなどゝは思つてゐなかつた。信長みたいな、ざつくばらんな男が廣い世間でも滅多矢鱈にある道理がなかつた。

だから濃姫は、

（尋常な人であらう）

と、思つたのであつたが、その期待が、こゝでガラリ外れた。といふのは、信長の方向とは、全く反對な方向へ、極端まで行き過ぎたやうな感じの光秀に、ぶつかつたのである。

『ほんたうに、お久濶、二十七年ぶりで御座いまするものを！』

と、濃姫夫人が挨拶を返した。

光秀が、

『有爲轉變は、世の習ひとは申しながら、濃姫どの、あなたの御實家、齋藤のお家は亡びて、こゝ稻葉山は、その名さへ「岐阜」と改まり、織田殿御本城とこそ相成つた。それがしが生れし明智城の如きは、東美濃に、そのやうな名の城ありしとばかり、今は昔語りと相成り申した』

さう、云ふと、

『それは、戰國の常で御座いまする。滅びたものは、力がなかつたので御座いまする。滅びたものを悲しみ嘆いてゐる時世時節で御座いませうか？』

濃姫夫人は、さすがに信長の妻らしく答へた。

『おう、健氣なるその御言葉！　げにも新鋭の第一人者、他に先んじて御上洛を、志して居らるゝ信長公の北の方と、光秀、仰ぎ參らする』

と、頭を下げた。

濃姫夫人は、胸のうちで、

（まあいやな！　お世辭なら、猿面藤吉郎の、邪氣のないのが、よほど增しだ）

と思つた。

その時、光秀が顏をもたげて、

『さればこそ、驥尾に附して光秀も、御上洛のお供仕りたく――』

さう云ひさして、夫人を凝視すると、

『あア、驥尾に附してなどゝ――』

（何を、お上手な！　光秀殿は朝倉の重臣ではないか！）

（五）

濃姫夫人は、光秀が、越前で仕官を求めて、今は重く用ひられてゐることはよく知つてゐたのだ。知つてゐたゞけに、「驥尾に附して」などゝ言はれると、あまりいゝ氣持ちはしなかつた。

（それほどにお思ひなら、なぜ越前の朝倉などに仕へた？）

濃姫は、ふと、父道三入道が、死ぬ年に、手紙のなかで、

『滿十六年ぶりで歸國した三十二歲の光秀は、自分が期待してゐた光秀ではなかつた。東海の麒麟兒たる、我が婿、信長どのを、認めるだけの眼がないやうだ。勿論その修養の深さと、材幹の卓拔さとは、一見しただけでも、一代の雄であることは頷かれる。だが信長殿を、認め得ないといふ性格に對して、予は、大きな不滿を持つ。光秀は、予が、なぜ尾張へは行かなかつたかと訊くと、寒中でも裸で、裸馬に乘るのが一つ藝の、出鱈目男に用はないと、さう答へた。予は、堪らなく厭な氣がした』

と、書かれてあつた事が、思ひ出された。

濃姫夫人は、どこまでも沈着な一厘一絲の隙も無いやうな、光秀の態度を眺めながら――

（あの頃は、遠い他目には、出鱈目のコンこん馬と、見えたに不思議はなかつた。夫に對する、光秀

どの〻批評も、あながち見當ちがひとも言へなかつたであらう。あのお手紙は――弘治三年――桶狭間の戰ひの四年前だつた。あの時分なら、光秀どのが尾張に用は無いと考へるのも無理はなかつた。だけど、桶狭間で今川殿をお討取りになつてからの、わが夫、信長の殿を、何とお思ひだつた？　わたしとは從兄妹、骨肉の緣につながるわが殿を、お頼りする心を起さずに、朝倉家へ隨身するといふのは、何としても聞えない光秀どの〻氣持ち！）

さう思つた時、光秀が、

『濃姫どの。――それがしは、おのが不明を、悔いてをりまする。世に謂ふ、燈臺もと暗しの譬へに洩れず、程遠く海山隔てし九州、中國あたりの大名に、仕へたとでも申すことか、隣國の越前に仕官せしことは、光秀一期の不覺。やうやくにして、眼覺め、只今、朝倉を退身して、かくは罷り越せる次第、何とぞ館の御前、よしなに御取計らひ下さらば、こよなき仕合せに御座りまする』

と、述べた。

『おゝそんなら御身は、館に隨身なさらうと、朝倉家を浪人なされましたのか！』

『いかにも、浪人仕つた！』

『それが、眞實なら――』

濃姫の、思慮に熟した美しい眼が、靜かに、探るやうに、光秀の眸を、見入る。

すると光秀は、ぢつと見返して、

『眞實なら――と、御疑ひは本意なし！』

と、答へた。

濃姫夫人は、

（でも、油斷はならぬ！　僞りも、卑怯も、怎んな手段も勝つためには、擇んではゐられぬのが、戰國の今日だ！）

早い話が、瀧川一益。――信長のために、伊勢を扼する桑名・員辨の二郡を奪ふ目的で、舊友の服部左京を、騙りの罠に、まんまと引き摺り込んだではないか。

（桶狭間でお勝ちの館をも、朝倉に見替へた光秀どのが、何で急に氣がはりを？）

『眞實だといふ、なにか證據でもお有りで御座いませうか？』

要心深さが、濃姫夫人の心に働いた。

（六）

證據があるかと、いはれて光秀は、

『無くて叶ひませうや。證據は、こゝに』
内懐ろから、取り出した二通の狀袋。
狀袋の表には、一字も書いてなかつたが、中には、足利義昭と、細川藤孝とが、いづれも信長に宛てた手紙が這入つてゐたのだつた。
『いざ、これを』
と、膝行りよつて、恭々しく手渡しすると、
『何で御座いませう？』
濃姫夫人は、首をかしげた。
『御身分、尊貴なお方よりの、御書面で御座りまするぞ』
光秀は、もとの座に戻つて、
（問きしに優る、嬌やかな、見事な奥方ぶりぢや！）
と、思ひながら、夫人の練れた容姿を眺めた。
濃姫夫人が、
『わたくしへの、お手紙で御座いませうか？』
さう訊ねると、

『いや。信長の館への、御書狀で御座りまする』
『あら左様でございましたか。それならば、暫く、お待ちを！』
會釋を殘して、夫人は、小書院から出て行つた。
むろん、證據だといふ、二通の手紙を、夫に見せるためだつた。たゞ一人で濃姫は、廊下を渡つて信長の座所へ行つた。
居間の入側の闕を、跨ぐと、襖越しに、大きな鼾が聞えた。
（あアら、お寢つていらつしやるわ）
次の間から、襖を開けると、信長は、どこかの繪圖面らしいものを、顔に蔽ひ被せて、大の字なりに手足を延し、室の中程に仰のけ態に寢てゐた。
庭に面した戸は開け、放されてゐた。若葉の香りが、晩春の爽かさを、感じさせるのだつた。
（まあ、お心地のよささうな！）
一度、立ち停つた足を、わざと音たかく踏み鳴らして見たが、鼾は却て大きく成る氣味だつた。
夫人は、近寄つて、圖面の紙を夫の顔から、そつと取り除けた。
すると、なんとあきれた事には、
信長は、鼾聲をゴウオー、ゴウオーと鳴らしながら、ぱつちりと眼は見開いてゐた。

「あアれ！」
思はず、濃姫は聲をたてゝ、
「お狸でいらつしやいましたの、お憎らしいこと！」
と、謂はゆる優睨みといふので睨むと、信長はビタリ鼾を止めて、
「春眠、晝間も覺えず、といふやつよ」
と、云つた。
「もう花は、とうに散りましたぞえ！」
夫人は、側に坐つて、嫋やかな流眄を送つたが、信長は氣だるさうに、
「兎に角、いゝ陽氣だよ」
と、薄目に、眼をつぶりさうにするので、
「もしえ！」
しなやかな手先を、夫の脇腹へ置きかけて、ゆすぶりながら、片手に持つてゐた二通の狀袋を、示して、
「御身分の、貴いお方からの、お手紙で御座います」
さう云ふと、

「なに、貴いお方？」
信長は、起きあがつた。

（七）

起き直つて、
「どこから屆いたのだ、誰が持參した？」
信長が、訊くと、濃姫夫人は、
「あの、持參いたされましたのは、明智光秀どので御座いまする」
「明智？　越前からか？」
「はい」
答へた時は、もうゴロリと、信長は、また仰のけに、大の字なりに、元の杢阿彌。
寢てしまつたので、
「あらまあ厭な！」
美しい顏を、顰めると、

『いやなは、こつちの申分だ。うつかり釣り込まれて、半身を起したのは、俺の不覺だつたよ』
『あアれ隨分――』
『隨分、馬鹿を見たよ』
信長は、仰向きながら微笑して、
『越前からなら、およそ坊主還りの足利か、三十一文字の藤孝かの手紙であらうが、そんなのを有難がるやうな信長かよ』
と、云つた。事實、急いで起きあがつたのは、ひよつとしたら、京都の、やんごとなき御所からの尊貴な御書狀ではなからうかと、そんな氣がしたからであつた。だが、越前から明智が、持參したのだと。さう聞いた途端に、
(なアあんだ!)
莫迦々々しいと思つて、再び寢轉んでしまつたのであつた。
濃姫夫人も、さすがに呆れ顏で、
『もう、ほんたうに、どう遊ばしたので御座いますの?』
いさゝか、たしなめるやうに云ふと、
『御覽の通りだ』

『あら?』
『この通り、寢ツころがつてゐる。當るも八卦、當らんも八卦、だが俺の見當、圖星か怎うか、その狀袋の中の手紙出して御覽』
信長は、さう云つて、夫人に、手紙を出させた
いつもながら、傍目には、野方圖もなく、箍が緩んでゐるやうに、見えても、信長の洞察には、驚異すべき閃きがあつた。
ピタリ、正確にその、察見は、的中してゐた。
『どうだ?』
『あら仰有る通りで御座いますわ』
『ふゝゝゝ一々あらを附けないことには、話の出來ぬといふ奥方だ』
『あアら!』
濃姫夫人は、口に手を當てたがおそかつた。
『それ見い!』
『でも』
夫人は、いとも嬌やかに、媚態をつくつた。

『いゝ歳をして、若さうな眼つきをするよ』
『あアらお酷い！』
全く、信長夫婦は、いつまでも若々しかつた。
『兎に角、その手紙――なにが書いてあるか、讀んで見い。どうせ寄る邊のない不運な身の上だとか何とか、泣き言を並べて、朝倉はとても頼りにならぬから、越前にゐても、うだつが上らん、見切りを附けて、岐阜へ行くから、よろしく頼む、京都へ歸れるやうに、骨折つて呉れ、とでも云つて寄越したのだらうが、まあ其方、讀んで見よ』

（八）

世の中には往々、勘のよい人がある。
極めて勘のいゝ人となると、それは無論、滅多には無いが、信長は、その滅多にない人の隨一人だともいへる。
『呉子』に、
「これを擊つの道は、必ずまづ、之に示すに利を以てし、而して引きて之を去らば、士、得るを貪

りて、其の將を離れん。乖に乘じて、散を獲り、伏を設けて機に投ぜば、其の將、取るべし」
と、あるが、信長が、この呉子の箇所を、そらんじてゐたか怎うかは、疑はしい。
だが、桶狹間の戰ひで、信長の採つた戰法は、全くこゝに、拔萃した呉子の戰略そのまゝであつたのだ。
『呉子』を、諳じなかつたとすれば、これが謂はゆる勘のよさだ。
すでに詳しく述べたことだが、桶狹間役では、今川の兵力は、四萬、――現今の戰時編制でおよそ二箇師團に相當する大軍だ。ところが、これに對抗した織田軍は、現在の步兵一箇聯隊くらゐの兵數すなはち三千內外に過ぎなかつた。
で、信長は、まづ國境附近で、防勢作戰を用ひ、丸根、鷲津、中島、丹下、善照寺などの城砦で、敵軍を分散させて置いて、疾風迅雷のやうに義元の本營を襲つたのであるが、つまり驚くべき勘のよさだ。
今、明智光秀の持參した二通の手紙を、まるで透視術の天才みたいに、見通したといふのもまた、信長獨特の、不思議な感受性からであつた。
手紙を讀み終つた濃姫夫人が、
『あアら仰有つた通りで御座いますこと！』

さう、云つた時、
『明智を、こゝへ伴れて參れ』
と、信長が云つた。
『すぐに、こゝでお會ひ遊ばしますの？』
『む』
なほ、仰寢のまゝで答へて、
『實は、待つてゐたのだ』
『え？』
夫人は、意外さうに小首をかしげると、
『明智が、やがて來さうなものだと、俺は、ずゐぶん心待ちにしてゐたのだ』
信長は、微笑しながら、むつくり起きた。
『あアら？』
『ほい、又あらか』
『でも、あらにも、あらが御座いますものを——』
『いゝから呼んで來い』

『大丈夫で御座いませうかしら、お輕はずみ遊ばして——』
『何が輕はずみなものか』
『でも、油斷のならぬ世の中で、御座いますぞえ！』
『わツはツはゝゝゝ！』
『でも——』
『今度は、でも攻めか、心配するなよ』
『桑名の城を奪つた、一益のやうな事も、御座いまする』
『はツはツは、馬鹿の一つ覺えといふ奴さ』
信長は、さも可笑し氣に、笑つて、
『明智が來たのは、筋が通つてゐる。來なければならぬ筈の者が、來たまでだ。餘計な案じ事は要らぬから、さつさと呼んで來るがいゝ』
と、云つた。
濃姫夫人は、光秀を呼びに出て行つた。

小谷訪問

(一)

信長は、光秀に、

『朝倉が、四千五百貫出してゐたなら、俺は一萬貫、はずまうではないか』

と、云つたものだ。

明智光秀は、てんがけから、一萬貫といふ堂々たる大身で、織田へ隨臣することになつた。

一貫の換算については、考へ方が區々で、定説がない。一貫で五石、或は一貫で七石、または一貫で十石といふ、およそ三通りの見解がある。五石なら、一萬貫は五萬石、十石なら、一萬貫は十萬石である。

兎に角、いきなり無條件で、光秀に、一萬貫呉れたのは、思ひきつたものだ。譜代の重臣、荒子の城主、前田犬千代利家でさへ、知行は、二千三百貫だし、桶狭間第一の功臣梁田政綱が、報いられた

所は三千貫だ。

して見れば、光秀に對しては、餘程、見所があつたに違ひない。

信長といふ人は、吝嗇、けちん坊、と屢ゝ、譏られた程、人に物を呉れることが嫌ひだつた。餘程の、骨折りをしたり、手柄を立てたりした者にも、乾柿を一つ褒美に呉れたりなどする。

だが、時たまには例外もあつた。この場合、即ち光秀に一萬貫を、與へた事の如きが、それだ。

濃姫夫人は、すこし揉つたそうに、美しい眉目を歪めて、

(あらまあ、狐こん殿が、いつの間に、お狸にお成りなのであらう?)

と、思つた。

勿論、この場合のは、夫の狸寢入りについて考へたのではない。

(あんなに空恍けて、おいでになつても矢張り、公方様を、お道具にお使ひ遊ばすお氣なのだらう。だから越前から御動座を、お取持ちする明智を、あんなにも御優待なさるのであらう。それに違ひない!)

そんな風に考へたのであつた。

足利義昭の、越前の一乘谷から岐阜へ動座する計畫は、藤孝と光秀の、合作であつた。

で、この計畫は、いよ〳〵實行に移された。公方館から、藤孝が使者として一乘谷の城へ行つて、

『此度、阿若丸どの御早世の御悲嘆、御愁傷の眞最中に、心なく京都へ、進發の事、仰せ出され——きつく御遠慮これあるところへ、美濃の國、岐阜の織田殿、申上ぐる旨あるに依つて、近日、彼所へ御動座あられませうぞ』

と、朝倉義景に向つて、告げたのであつた。

すると、義景の驚きは、尋常大體ではなかつた。

『な、な、なんと？　京都への進發も、今しばらくで御座るに、それまで當國に、御逗留あつて、諸國の大名共を、召し、多勢を以つて、一擧に、都の三好、松永を、お攻め遊ばさるゝ事こそ、萬全の御策かと存じ上げる。別して織田は、父祖代々の怨敵に御座りますのみならず、信長は、とりわけ身共とは不快な間柄なれば、わが公方、義昭が、岐阜へ御動座しますに於いては、信長一人、事を行ひつひには斯く申す義景を、邪魔にいたすべき事は、疑ひなし。しからば、日頃の忠節、水の泡と相成りませう。誠に、なげかはしい事で御座る』

と、義景は、藤孝に答へて、恨み言を述べたてたのであつた。

（二）

足利義昭は、朝倉の心を慰めるために、

「この度、當國を退座に就き、忠義神妙に思召候。向後、身上見放す可らず。

義昭判

七月四日

朝倉左衞門督どのへ」

と、書いた文書一通を與へた。

朝倉義景は、亂酒亂淫の祟り覿面で、ひどい神經衰弱症——重い虚脱——腎虚ともいふが、これにかゝつたのである。そのため、近頃では、怨むにも、怒るにも、張りが無い。つまり、徹底しないのである。

だから、岐阜へ公方を取られては、大變だと思ひながらも、さて怎うにも出來なかつた、相成り申さんと、斷然これを拒むだけの氣力が無かつた。

七月十六日。公方は、一乘谷を出發した。

それを國境まで、送つて行つたのは、義景の一門、朝倉景恒と、重臣、前波藤右衞門とが率ゐる、人數一千人。

今庄に一泊。翌日、江州に入つて、木ノ下の地藏堂に參詣。

この時、小谷の淺井長政が參上——目見得した。

公方は、淺井の案内で、小谷の休懐寺に着いて、三日間、滯在することになつた。

ここで、長政の父、淺井久政も目見得を遂げた。淺井父子からは江州名産の献上物が、いろ〳〵あつた。

岐阜からの出迎へとして、不破河内守、内藤勝介を初め、一千五百程の兵が、到着した。

休懐寺出發の日は、淺井長政が藤川まで、五百の兵で、見送つたし、藤川からは、織田の兵だけが公方と藤孝を警護して、美濃は西庄の、立正寺が、旅館と定められてあつたので、その寺に一先づ導き入れた。

饗應役は、すでに一萬貫を知行して、織田家の重臣に列した、明智光秀が勤めた。

旅館の四面には、よもすがら明々と、大篝火を焚き連ね、饗應はすこぶる善美を盡したので、公方義昭も、細川藤孝も、嬉しさに涙を浮べて、思はず膝と、光秀の手を握りしめた程だつた。

『明智！　一重にお許の骨折りぢや、予は、何と禮の言葉も無いぞよ！』

公方が、さう云ふと、藤孝もまた、

『つい先刻も、上様は、お身の恩は、御終世お忘れなからうと、仰せられたぞ明智殿！』

と、言葉に心からの感謝を籠めた。

藤孝のみでなく、公方に附き添つて來た昵近衆も、騒き合ふ聲々が安堵の喜びに、うち震ふのであ

つた。

二十七日。信長は、直垂を着ていつになく眞面目顏を繕つて、岐阜の城から　公方の旅館、立正寺へ出向いた。

（怎うも着馴れないと、恰好が附かんわい。きつと、どこか、ひン曲つてゐるだらうが、たとひ、人が笑つても、俺は今日、笑はない事にする。普段の格をやると、ぶち壞しだからな。これで相當、骨を折るよ）

途々、さう自分に云つたり、聞かせたりして、やつて來たのである。

目見得の献上物は——

一、國綱の太刀　一腰。
一、葦毛の駿馬　一匹。
一、鎧　二領。
一、沈香　百斤。
一、縮布　百反。
一。島目　千貫。

以上。

（三）

「怎う遊ばすのです？」

猿面が訪ねた。

信長は微笑して、

「カサゴ野郎の、仲間になつたのか？」

「ホ、成程な！　鯱ほこ立ちの一見ですか？」

「おたんちん！」

と、信長は、擽つた氣に顏を歪めた。

「ホイ。ほんまの一見なら、婿君が岐阜へ、お出になる。それがですね、お嫁御寮の市姫樣の、お里の兄君がですね、御一見に、小谷へお出かけに成るのは、鯱ほこ立ちです。逆でござります——」

「むだ口を叩かずと、支度々々」

信長の小谷訪問の供廻りは、木下藤吉郎、以下わづかに、百五十餘名だつた。

だが、猿面の用意周到さは、蜂須賀、稻田、堀尾の面々を初めとして、心の利いた退兵一千餘りを

忍び〳〵に出立たせて、柏原、醒井、番場、摺針峠の、谷々、峰々に匿して置いて、合圖を定め、いつ何時でも、馳せ集まつて、變に應ずるやうにして、出掛けたのであつた。

摺針峠には、立派な休息所が出來てゐた。

市姫の婿、淺井長政は、その峠の休息所まで、出迎へてゐた。

引具す所の、人數は一千人を下らなかつた。弓、鐵砲を揃へて、武備いかめしい態だつた。

ところが、信長の供廻りは、一人も武裝してゐなかつた。みな平服に寛いでゐたので、淺井の人々は、却て怖れをなした。初對面の挨拶が濟むと、信長は、

『目に初めての、北江州の景色を眺め〳〵ゆつくりと參らうから、婿殿は、どうぞお先に、佐和山へお戻りあれ』

と、云つた。

(案に相違！)

長政は、たぶん信長が、自分と馬を並べて、佐和山まで一緒に來るだらうと思つた豫想が、全く外れた。

もしも何等かの、警戒心があるならば、信長は、長政と乘馬を並べて路を行くのが、一番安全であつたらう。

なぜかと云へば、飛道具で、路傍の物影から狙撃するやうな場合、狙ふ者にとつては、信長が、長政の身近くにゐるといふ事は、全く厄介な、不都合な事柄だつた。

狙ひは、外れるかも知れないし、外れないまでも、信長が倒れた時、側近の家來は、もちろん直ぐさま、長政に斬つてかかるに違ひないから、厄介だが、信長としては、この場合、乘馬を並べて長政と同行するのが、最も安全だつた。

それを、わざ〳〵。

『後から參る』

と、云つたのだ。

長政が、佐和山へ戻ると、淺井家中の豪傑の一人として知られた遠藤喜右衛門が、

『殿！　ちとお耳を拜借』

囁いたのは、人無き別室で、祕密に申上げたい事があるといふのだつた。

長政と、遠藤とは、佐和山城の奥深い一室で、二人きりで向ひ合つた。

遠藤喜右衛門は、まるで熊の毛のやうな髭の中から、眼が光るといふやうな荒男だつた。

『さて、何事ぢや』

『他でも御座りませぬ。拙者は今日、摺針峠で、織田館の、相形、骨法を、つら〳〵觀ひまして御座

ります」
「うむ」
長政は、遠藤の顔を、屹と見詰めた。

（四）

棕櫚刷毛のやうな眉。
その下から爛々と光る眼。
「やがては、御當家を牙にかけて喰らふ豺狼、で御座りませうぞ」
遠藤喜右衛門が、さう云ふと、長政は、
「織田殿の骨相を、さまで猛しく觀たのか？」
その觀相には、不服だといふ顏付きで、
「してそなたは何とする？」
「輕々しき體にて、參られしこそ幸ひ、不意を襲つて、討果し、御首頂戴いたさうと存ずる」
「否、思ひも寄らず！」

「殿ッ！」
「以つての外だ」
「殿は、さまでに市姫様を？」
「妻、愛しさからのみではない」
「そりや、お美しい奥方様、お愛しがりは御道理ながら、男女の閨情にほだされて、淺井の御家をお忘れあるかッ？」
遠藤は、ます〳〵眼光を烈しくする。
「おのれ慮外を申すなッ！」
長政も、また眼を險しくした。
だが、遠藤は疊みかけて、
「殿ッ、慮外とは喜右衛門、心外で御座りまするぞッ、さあ御家が重きや、さ、さ、それとも、奥方様の——」
「ちえゝ默れッ！」
「默りませぬッ、奥方様の、市姫様のお綺量は、あれこそ傾國の美で御座るッ！」
「えゝ默れ、默れ、默りをらぬかッ！」

長政は、大聲叱咤した。
密談どころか、かうなると、双方呶鳴り合ひの喚き合ひだ。
今や近臣どもは、驚いて、廊下先、入側までも聞せつけて、何事が起つたかを、たしかめようとするのだつた。
（駄目だ！）
遠藤喜右衛門は、かうも自分と殿との氣持が、懸け離れてゐてはいくら大聲で、喚いて見ても、到底らちがあかんと思つた。
徒勞であると觀念はしたけれど顧つてもないこの好機を逸しては信長を討取るべき機會は、もう再び來ないだらう、と感じると居ても立つてもをられなかつた。
（信長が、あんな小人數で訪れて來たのは、これぞ天の與へとも、言へように、チェッ何事ぞ、不覺々々！　お嫁御寮の可愛さに、うだつの拔けた若殿に、かゝづらつてゐては、主家、淺井家の破滅！　いで大殿に！）
遠藤は、若き主、長政に愛想を盡かして、急ぎ小谷城へ馳せ歸つて、大殿――久政に、自分の思慮の、是非の判斷を、乞ふ外、術は無からうと思つたので、こゝ佐和山の城から、馬を走らせた。
久政は、すでに家督を嬰兒の、長政に讓つて、自分は隱居の身であつたが、軍國の大事となれば、

まだガッチリと構へて、自ら聽きもし、裁決を下しもしてゐた。
小谷城に馳せ戻つた遠藤は、
『天與の機會を、棄てて顧みようとも遊ばさぬ長政の殿で御座りまする。願はくば、喜右衛門が心底御汲みとり下し置かれ、大殿の御許しあらん事を――』
と、忠義に凝つた一念から、眞心を髭面から、横溢させて懇願するのだつた。
久政は、
『喜右衛門、小敵と侮り難いぞよ。織田の側近には、勇士が尠くなからう』
と、明らかに氣乘り薄で、云つた。
『さらば、鴆の毒なりと――』
遠藤は、聲を低めた。

（五）

『何？　鴆の毒を？』
久政は、鸚鵡返しに云つた。

『大殿！』

遠藤喜右衛門は、これは見込みがあると思つた。

（若殿は、新奥様の御色香に、ふら〳〵に酔ひ痴れておいでちや。勇氣絶倫な、おん持前が、まるでフニヤふにやに腐やけて了つた。あゝ怖るべきは、色道ぢや。戒むべきは閨の情ぢや、人間も、美女の虜になつては、駄目だ！　婦女こそは、勇猛心を摩擦へらす藥研だとは、よくぞ謂うた！　それに引替へ、大殿は、お歳は召しても、御隠居でも、さすがに御鍛錬の御性根ほどあつて、自分の申す事にお耳をお貸し下さる）

そんな風に考へてゐた遠藤が、ハツとした——

『愚鈍者めがツ！』

久政の口から、叱責の呶號が、勃發したからである。

『や、鴆毒の儀は——？』

『おゝ金輪際ツ！』

『しからば、大殿にも御許しが？』

『成らん！　考へても見よ喜衛。——織田殿が、僅か百五十人の、しかも平常着の身輕さで、いさゝかも用心の體もなく、訪れて參られた事は、長政と婚姻して、義兄弟と成つた、その誼を思へばこそ

ぢや、それを心無く鴆を用ひて、毒殺せば、これ斷じて人の道にあらず！』

久政は、道理を說いて、

『また、よしんば信長殿を、たばかつて殺し得たりとするも、淺井は織田の勇猛に怖れて、欺いて毒を盛つたと云はれては、弓矢の恥辱、末代までの淺井の名折れぢや！　思慮の足りぬにも、程があらうぞ、喜衛、今、毒など飼つて世上に顏向けが出來ると思ふかツ』

と、嚴しく極つけたのである。

これには遠藤も返す言葉が無かつた。

けれども、思ひ定めた心を、飜へしたわけではなく、祕そかに思つたことには、（たとひ卑怯と、譏られようと、この絶好の機會を逸して、みす〳〵織田殿を、生けて岐阜へ歸らせては、必ず後日に悔いがあらう。誰が何と云はうと市姫のお輿入れは、爲にしようとの魂膽の、武略結婚に違ひないものを。この度ここで見遁すといふことがあるか？　よしやお許しが無いにもせよ、俺は、織田殿を擊つて、斃す！　自分一人の目論見では、とても毒は盛れんが、よし！　不意を襲つて刃にかけて、討ち取らう。討ち取らずにはおくものか！）

遠藤喜右衛門は、さう覺悟を決めて、小谷の城から、佐和山へと立戻つた。

後で思へば、この遠藤の豫想は誠にピツタリと的中したのであつた。

この時、毒を飼はなかつた淺井父子は愚だつたといふ人があるかも知れない。しかし、それは、たゞ結果からのみ判斷することで、それこそ愚論である。後に、織田と淺井が、干戈を交へて、謂はゆる小谷の方の悲劇を生じたのは、その後に起つた情勢の變化によるもので、事實この際の信長には、淺井を敵として滅ぼすか滅ぼされるかの激戰を、戰はうといふ心は、毛頭も無かつたのである。

して見れば、淺井父子の考へ方は、無論、正しかつたと言へる。

だが遠藤は、

（短刀を、懷中に匿して……）

信長へ、近づかうと考へた。

（六）

小谷は本城、佐和山は支城ではあつたけれど、防備要害は兎に角として交通の利便からいつて、佐和山の城は、淺井氏にとつては大切な城であつた。

『織田殿の御參着！』

と、よばはる聲、聲。

摺針峠から、信長が着いたのだ。長政は出迎へた。

本丸表書院に、慇懃に招じ入れて、すでに峠の休息所で、義兄弟初對面の挨拶は濟んでゐたのだから、時を移さず、直ぐに饗應の酒宴が開かれた。

磯野丹波守員政が、

『御毒味を仕る』

と、信長へ進むべき長柄から、酒を給仕の小姓に注がせて、飲まうとすると——、

『わツはツは、餘計なことを——』

信長は、長政を見て笑ひ、また磯野を見て、心から可笑しさうに蟠まり無く云ひ放つたのである。

だが、磯野は勿論、毒味をした。

磯野丹波守は、高島郡、大溝城の城主で、淺井の「四翼」の一人といはれてゐる大剛の部將で、强弓の精射としては、近隣諸國に名の響いた人物だつた。

長政が、

『あれこそは、お聞き及びも御座らう磯野員政——』

と、紹介すると、信長は、

『丹波か、怎うもそんな恰好だと思つた』

微笑して、
「餘計な酒の毒味をして、食べ物の方は、如何いたす？」
と、磯野の顏を眺めた。
「何と仰せらるる？」
「料理の方は？」
信長は前の膳部を、指差して、
「一々毒味仕るか？」
「はて？」
「一品、一品、食べて見て、留り殘しのお餘りを、この信長に食はす氣か？」
「お、お戯れを！」
「わひゝゝゝ戯れでない。充分な毒味なら、さうでも致すほか、致し方があるまいぞ。留り餘しを、まさか食はされもすまいから、毒味などと云ふことは、およそ馬鹿げたことぢやよ、のう長政殿」
と云つた。
實に合理的な言葉なので、長政も磯野も、何と返答の、仕様もなかつた。
ちやうど其時、座敷に這入つて來たのは、遠藤喜右衛門であつた。

（おゝ！）
長政は、内心ひやりとした。
時も時だし、先刻の毒害の件もあつた。
信長が、
「いかゞ？」
と、長政の顏を見直したので、覺えず、ぎよつと長政は、薄氣味惡く感じて、
「御尤も！」
さう、返辭をした時、
「當家、恩顧の臣、遠藤喜右衛門に御座ります。お見知り置かれを——」
れいの、棕櫚刷毛眉を、ピクピクと昂げて、酌取りの小姓の側へゐざりよつて、長柄の銚子を、自ら受け取つて、
「御酌、仕らう」
と、云つた。
そして、信長の膳の前へ、近づかうとした。
懷中には、鎬ぜまの則重の短刀を呑んでゐたのであつた。

（七）

長柄の銚子を持つた遠藤喜右衛門の、底光る双つの眼が、棕櫚刷毛眉の下、熊髭の中で、ギラぎらと輝いた時、

「もしもし！」

つかつかと、側へ寄つて、いきなり長柄を持つ逞しい腕へ、ちよいと手をかけたのは、猿面藤吉郎だつた。

「や、何？」

遠藤は、睨むやうに眺めた。

「人ぢや」

「や？」

「かう見えても人間ですよ、遠藤殿とやら、手前は木下藤吉郎」

「あ、成程、墨股の木下殿が御身か」

墨股に築城した手柄は、江州へも聞えてゐたのだ。

猿面は、にたニタと顔を、ゆがめて、

「いかにもな。ちよいと見の、僻目には、幾分、猿に似通つた面影もどざらうなれど、ちつと瞳を落ちつけて御覽じろ、なか〳〵稀に見る優男ですよ」

「ぶツ、驚き入つた優男ぢや！」

遠藤は、ます〳〵眼を怒らせて、

「退かれいつ」

押し退けようとしたが、

「これさ、不似合ですよ、似合はんですよ」

猿面は、力まかせに、遠藤の手首を握り締めた。

「えい、邪魔な、邪魔をなさるなッ！」

「えい、似合はんと申すのにッ！」

「何が、何が似合はんッ？」

堪らず遠藤が、大聲を出した。

しかし猿面は、すこしも力をゆるめずに、

「お酌といふ柄ですかよ、そのお面構へでは？」

「つ、面構へ？」
と、叫んだのは、さすがに悸つと、胸に應へたからであつた。
「左様す！」
「何ぢやツ、その言語は？」
「手前の言葉ぢや。およそお酌取りと申す者は、美しい女子か、綺麗なお小姓か若衆かでないと、と
んと風情の無いものですよ、遠藤殿、御邊みたいな熊襲顔の、殺氣立つたのでは　美味い御酒も、味
が消える」
殺氣立つたに、言葉の力が這入つた。
（あ！　さては！）
自分の心を、看破つたのか？
遠藤が、さう感じた時、
「似合はんと申したのは、そこのこと。せめてこの、藤吉郎ほどの男ぶりなら、御酒の味とて、中位
には――」
と、云ひながら、長柄の銚子を遠藤の手から、引つたくつて了つた。
遠藤は、奪はれた長柄を、取り戻さうとして、猿面を引戻した。

だが其時、長政が、
「これ喜衛！」
と、聲をかけて、
「木下は客人の一人ぢや、お客に逆らふは無禮ぞ」
屹と、叱り窘めた。
長政が、叱つたのは、遠藤の害心を怖れたからである。
猿面が、
「それ御覽、場違ひぢやよ！」
と、體格魁偉な遠藤を、思ひきつて突ツ放した。そして、
「ひヒひヒひヒゝゝ！」
と、奇聲を上げて笑ひながら、信長の方を眺めた。

（八）

「おのれ喜衛、客人に逆らふ無禮を、えゝ止めぬかッ！」

かさねて長政が、敗鳴つた時、座敷が急に、華やかな色彩を添へた。
長政の若妻、市姫が、侍女たちをつれて、酒宴の席に現れたのであつた。
むろん遠藤の心の中を知るものは、長政のほかには、小谷城の隠居の大殿、久政だけだから、この席につらなる家臣どもは、いづれも、なぜだらう？　殿、長政が、あんなに遠藤を敗鳴りつけるのか譯が解らず、ただ不思議な思ひをするのみだつた。
市姫は、夫の傍に坐つて、
「あら喜右衛門は、怎う致したので御座いますの？」
と、訊いてみたが、長政は、遠藤から眼を離さずに、
「罷めいッ、退れッ！」
危惧の念に、堪へなかつたからである。
（近づいて、突嗟に織田殿を、刺す氣かも知れぬ！）
だから市姫へ、返辭どころではない。
素破といふ瞬間を、頭に描いて身構へたのであつた。
（駄目か！）
遠藤は、機會を逸して了つた、と感じた。

だが、刺殺を斷念するのは、なんとしても殘念だつた。
（今、殺らなければ――）
氣は苛立つけれど、すでに出鼻を、木下藤吉郎に遮られ、おまけに殿、長政に斯うも警戒されては
たとひ斷乎として躍りかかつても、とても信長を刺殺すことは出來まい、と思はれるのであつた。
そのとき、藤吉郎は、長柄で、信長の盃に酌をした。
『退れと申すに、遠藤ッ！』
と、長政が、またも叫ぶ。
（チェッ殿のお腰拔けの、腑甲斐なさ！）
喜右衛門は、肚わたを、怒りに煮え沸らせながらも、元の座に、戻るほか無かつた。
すると藤吉郎は、長柄を持つて長政の前に來て、畏まつた。
『御一献、注がせて頂きまするです』
さう、云ふと、信長が、
『御亭主。――珍物のお酌ぢや』
と、長政へ、聲をかけた。
『ほう、いかにも名物だけのことは、どざる（御猿）ぢや』

ほつとした長政は、御座るを御猿に引ッかけると、藤吉郎は、ペコンとお辭儀をして、
『恐れ入りまして御猿で御猿ッ！』
と、お手の物に洒落のめして、
『は、御丁寧なる今日の御もてなし――館信長、ホトホト大悦つかまつる。かく申す珍物とやらの御猿、代つて御禮、厚く申述べまする。てまへ館は、至つて口不調法でいらつしやいます故、足らぬ所は、この猿めが、補ひを附けまして、さて、その御盃の御肴に、日頃取ッときの猿の、猿舞、と申すのをお目にかけますです』
ペラペラと、喋舌つて、唇を反らしたので、市姫は、吹き出し笑ひを、袖で抑へたし、長政も、信長も、聲を揃へて、大きく笑ふのだつた。
『淺井殿、いかが？　わはッはッは、珍で御座らうが！』
と、信長は、相好を崩した長政を、眺めた。
『はッはゝゝ珍々無類！　無類で御猿よ』
と、長政が答へた。

（九）

ふところの中で、鎬ぜまの則重が、血に餓えた呼びかたをするので、
（無念至極）
遠藤喜右衛門は、齒がみをしておぼえず呻き聲を、洩らすと、
『遠喜衛、いかが成された？』
隣席の士が、訝り尋ねた。
『怎うもせぬ』
『はて？　腹痛とでもいふやうな、唸り聲であつたが？』
『否、怎うも無いッ』
『遠喜衛！　なんぼ豪傑でも、病氣には勝てぬ。無理をしては毒ぢや、痩我慢をしすぎて、病を募らせては痴の骨頂――な、遠喜衛が緣喜でもなく此の席で、仰け反つたりしたら大事ぢや！』
『ば、ばかを申せッ！』
『んゝにや爲を思ふから云ふ。御免を蒙つては怎うだ？』

『チエえ、腹痛どときで唸るやうな、そんな弱蟲の此方かよ』
又、ギリ〳〵、齒軋りを嚙む。
そして屹と睨む遠藤の目が、ピタリと猿面藤吉郎の視線と出合ふ。
にんまり仄ゑむ猿面の、だが眼だけは、爛々と光る。
（うぬッ！）
遠藤が、唸る。
『これさ遠喜衛！　苦しさうだな』
『おのれッ！』
彼方の猿面の視線は外れたが、體に微塵も隙がない。
その時、藤吉郎は、長政の前に會釋して、扇を取つて立ち上つた。
御酒のお肴に、といふ猿舞だ。
兵者の
交り軽みある中の
酒もりや
と、聲張りあげて謡ひつゝ、舞ふ。

聲も珍妙、舞も奇手烈。
長政は、笑つぼに入つて、
『やあ大いに結構ぞ、結構ぞ！』
手を拍つて、賞めると、
『藤吉』
と、信長は、大口に笑つて、
『骨ない奴だ。今日は、妹、市姫を、長政殿へ緣づけて初めての對面ぢやに、猿舞とは、忌まはしいではないか』
さう、戯れると、
『これはしたり』
長まつた藤吉郎が、
『猿舞は、猿の裏返しで御座ります』
と、返辭をしたので、
『何だ、猿の裏返しとは！』
『裏返しは、逆です、つまり反對ですよ』

『その反對の逆を、何だと訊くのだ』
『はて、知れた事を！』
『馬鹿野郎』
『はい、猿舞は卽ち、市姫様を「去るまい」で、御座ります、幾千代かけての御契りを、壽いだ舞を御覽に入れましたわけで』
『わッはッはゝ、左様か！』
信長が、豪放な笑ひ様をすると、長政も至つて拘はり無げに、
『一しほ一入！』
と、藤吉郎の頓智を讃めそやして、
『さすが御祕藏の珍物だけあつて座中の興こそ、眞猿、眞猿！』
增る、優るに、眞猿をかけて利かしたのであつた。

（十）

藤吉郎の炯眼と、機智と、警抜と、洒脫な擧動との爲に、信長、長政の初對面は、無事に、などや

かに、朗かに、客も主も十分に歡をつくして、秋の午後は、もはや日が傾く時刻となつたので、信長は、やがての再會を約束して、佐和山城を辭した。
長政は、送つて、摺針峠まで來て、別れを告げた。
仲秋八月の陽は、すでに夕暮れが迫つてゐた。
柏原の成菩提院といふ天台宗の寺院が、信長の今夜の旅館だつた。
摺針峠から、醒ケ井まで二里。
醒ケ井から、柏原までが一里。
で、こゝ柏原まで來れば、美濃との國境まで半里しかない。
だが、勿論まだ淺井領であるから、こゝの成菩提院に宿るといふことは、從者が、わづかに百五十名としたら、ずゐぶん無用心な次第だつた。
すくなくとも、遠藤喜右衛門としては、（五百の兵で、あの寺を圍めば、たしかに討ち取れる）
と、思はれた。
（おゝ運命の神は、なほ、自分を見捨てゝはゐないやうだ。自分の志を、自分の苦衷を、天は憐れんでゐて下さる！）
そこで、逞しい駿足の駒に鞭をくれて、五里の長濱平野を横ぎつて、小谷の本城まで驅けつけた。

『大殿！』

と、久政に向つて、遠藤は、

『御當家が、織田殿と長く誼を結び得ぬことは、弓矢八幡、明らかで御座りまする。されば今夜、柏原を襲うて、御首を頂戴し、その勢ひに乘じて美濃へ亂入し、越前の朝倉家より援軍の大兵を乞ひ、越前、近江の聯合軍が、鉾を連ねて岐阜を攻めなば、勝利は疑ひ御座りませぬ。で、新公方様を、當お城へ迎へ入れまゐらせ、湖水の西、高島郡より都へ、切り上り、三好一家を追ひ落さば、淺井の御旗風は、いかばかり颯爽と、天下を靡かすことで御座りませう？』

と、述べた。

諄々と說いて、ふたゝび許しを願つたのであるが、久政は聽き入れなかつた。

遠藤は、しかし、

（おもひ込んだ此の一大事を、この儘にして空しく止めるのは、何としても本意ない。殘念だ。——よし、斷行！）

と、思案を決めた。

そして、家中の重臣、淺井掃部を、ひそかに語らつた。

『佐和山のお城では、殿の、お目が、光つてゐた故、心は逸れど遂に手出しが叶はなんだ。その口惜

しさ！』

『むゝ！』

同意した掃部が、頷くと、

『御推量あれ、掃部殿！　拙者は、この眞黑々な髮も、髭も、一時に白くなりさうに、覺えました ぞよ』

遠藤は、感慨に堪へぬといふ面持ちで、

『さりながら、幸ひにも貴殿の御胸中に、共鳴を得て、今晩、これより柏原へ押寄せることが出來ると思へば、この腕が、うづき立ちまする』

と、剛力の拳を固めるのだつた。

『兵は、五百で足りようか？』

さう、掃部が云ふと、

『充分！』

と、遠藤が答へた。

(十一)

『本當に百五十人足らずかの？』

淺井掃部は、いくぶん心もと無げな顏で云ふと、

『本當も嘘も、御座らぬよ』

面相に、ぴつたり、打つて附けの豪傑笑ひをして、

『この眼で見て來たのぢや』

と、遠藤は、自分の眼を指差した。

『寺の四方を押ツ取卷いて、亂入して皆殺しに致すとすれば、御馳走役の、縫殿助と九郎次郎を、ま以つて、呼び出さんと不可んな』

小谷領に一夜を明す信長への、接待役は、淺井の一族、縫殿助と中島九郎次郎であつた。

『織田殿を討取るためには、多少の犧牲は、已むを得ぬでは御座らぬか』

遠藤が、さう答へると、

『しかし、あらかじめ、出來る相談なら、するのが當然だ。縫殿助と九郎次郎を、見殺しにも致されまい』

掃部と、縫助殿とは、骨肉だつた。

『大義、親を滅すぢや』

遠藤は、なまじ呼び出したりなどして、信長主從に、氣どられては、事の破れだ、と反對したのである。

『手前に云はせりや、お安い生贄だ』

『え？　何が！』

『ぜんたい縫殿助は、怪しからんッ！』

『なんで？』

『縫殿助までが柔ツこく、成るといふ法が御座らうかよ？』

『はて、柔ツこくとは？　岐阜館に對してか？』

掃部が、訊くと、

『つまり若奥樣の、色奥方の、市姫さまに對して、あゝ骨無し同然に軟化するッて事が、あるかッ！岐阜から附添つて來た御用人ではあるまいし、いや御用人でもあゝはダラシが無くはなからう』

『すこし煩こしいな』

『若殿の長政公は御自身が、若奥様の夫でおはすゆゑ、そりや骨が酢漬けに、肉が膾にも、お成んなさらうわさ。しかし鍵殿助がちや。傍で腎虚するとは、以ての外だ。不埒を、通り越してゐる。な、さうは覺さぬか？』

『あはッはゝゝ！　と言つて、見殺しは可哀相ぢやよ』

小谷から柏原までは五里。

急いだが、すでに夜半過ぎで、弦月は傾いて、伊吹山も靈仙山も黑く靜かに、蟠まつてゐるのだつた。

五百の兵が、やうやく柏原へ近づいた時、その先頭に馬を進めてゐた二人の將、すなはち掃部と、遠藤とは、全く同時に、

『呀ッ、あれは？』

『あれは？』

と、叫んだ。

咄嗟には、火事かッ？　と、感じた程だ。

眞黑い闇の中から、信長の旅館成菩提院の建物が、赤々と浮き出して見えたからであつた。

『やあ！　篝火だ！』

『大變な篝火だッ！』

闇を染め、寺院を映し出してゐる、おびたゞしい篝火。

『あれ〳〵兵だ、兵！　兵！　兵！』

『兵、兵！　大層な軍勢だ！』

寺の境内から、はみ出して、築地のぐるりには、武裝兵が群れて槍の穗先が火影にキラきら。

江南攻め

(一)

『ありや何千といふ警固の兵！　さては氣どられたか、遺憾、遺憾！』

『む、不可ん、不可ん！』

遺憾ながら不可ん、と諦めなければならなかつた掃部と、喜右衛門とであつた。

だが、旅館、成菩提院を警衛する織田兵を、數千人の兵力と思つたのは、影に怯えた趣きだつた。

事實は猿面藤吉郎の手配による、蜂須賀小六らの兵千ほどが、國境から柏原界隈を警戒してゐたので、そのうち寺の警固に當つたものは、五百にも足りなかつたらう。

信長は、無事に岐阜まで歸るとすぐに領地の全部に動員令を下した。

『いよいよ御上洛かの』

『おそすぎる位だ』

『日頃、鐵砲玉みたいにお速い館樣としてはな』

しかし、速いばかりが能ではない信長だつたのである。

天馬空を行くのか、こん〳〵馬が宙を行くのか、いづれにしても、人を呀ツと云はせる速さがあつたと同時に、また極く綿密な用意もあつた。

まづ江北の淺井を訪問して、親戚の緣を結んだ義兄弟としての初對面を濟ましし、妹婿の長政が、どんな氣持でゐるかを慥め、上洛の軍を進めても、後顧の心配無しと見て、それから分國の兵を、動員したのだ。

かつては尾張一國の主でしかなく、桶狹間役では、三千の兵を動かすさへも容易でなく、わづか二千の寡兵を提げて今川の本營を衝かねばならなかつた信長も、いまや濃・尾二國、北伊勢のほかに、三河の一部までも動員して、上洛軍を編成することが出來るのだつた。

軍の兵力二萬八千。

しかも、それは充分に餘力を殘しての、編成だつた。

軍容は、とゝのつた。けれども信長は、急がなかつた。

『南江州へ、使者を遣らう』

と云つて、

『正使は、細川――副へは、夕庵』
さう、人選をすると、そばにゐた柴田權六が、
『夕庵では、どうも重みが足りますまいに』
と、信長の顔を眺めた。
『カサゴ野郎ッ。同じ夕庵でも、夕庵が違ふのだ』
『え？　同じでも違ふと仰せられますか？』
『權六そなたの云ふのは、祐筆の夕庵だらう』
『はい』
『おれの云ふのは、瑞龍寺の和尚夕庵だ』
細川藤孝が、正使。
夕庵和尚が、副使。
この兩使が江南、觀音寺山の六角佐々木氏の本城へ、行くことになつた。
ふたりは江北の淺井領を通過して、愛知川を渡つた。
川向ふは、六角領だ。
まづ箕作城を訪うて、六角承禎入道に面會をもとめた。

（本城、觀音寺山の右衛門佐義弱に對面する前に、その父入道、承禎に會つた方が宜ささうだ）
細川藤孝は、さう思つたのであるが、會つてみると、入道の態度は、想像したよりも遙かに頑迷で不遜だつた。

（二）

承禎入道は、弘治三年このかた隱居して、六角佐々木の家督は、嫡男の義弼が繼いでゐたが、今年永祿十一年、義弼の年齡は、二十三でしか無かつたので、名は隱居ながらも、政治に軍事に入道の指導が行はれてゐた。
だが、近頃、兩三年は父子の仲が、とかく圓滑を缺いて、隱居所である箕作城と、本城の觀音寺山は、往々睨み合ふことが有つた。
で、藤孝が、まづ入道を訪れたのは、
（親子の不和を、利用できるかも知れぬ）
と、思つたからだ。
ところが、その豫期は外れた。

承禎入道は、
『上使とは、訝しき事かな』
と、云つたものだ。
この言葉は、觀音寺山へ行つたら、或は聽かされるであらうと、さう藤孝は考へてゐたのであつたが案外にも、入道の口から、それが出た。
（こんな事なら無駄であつた）
しかし直ぐ座を立つわけにもいかないから聞いてゐると、入道は、
『京都將軍家のことは、三好、松永の計らひとして、阿波公方家の左馬頭殿を、今春、室町の柳營に迎へ申して、これを將軍と仰ぎ、われらが家、佐々木六角はすなはち、管領たるべき約定で御座る。さればぢや、左馬頭義榮公の外に將軍と稱する方が、天下に有らう道理なし。なう兵部大輔——左樣では御座らぬかな？』
と云つた。
藤孝が、返辭をせずにゐると、
『な。これは理の當然ぢや』
承禎は、一そう傲岸な態度で、

『義昭殿は、前將軍の弟ぎみとは申せ、一旦、南部の佛門に入つて覺溪と號されし御身の上ぢや。室町へ御家督に、還俗の人は、不吉で御座る。血緣の近さは、さることながら、忌まねば成らぬ儀——と存ずる。且は、信長づれが、ありや何ぢや！　成上りの羽振りを利かさうとするのが、片腹痛たい笑止千萬！　元をたゞせば、斯波の家來の分際ではないか、しかれば勿論、當佐々木家の旗下の筈——それを何ぞや、下知がましく、上洛に加擔せよなどと以つての外ぞッ』
と云ひ放つた。
藤孝は、腹の中で、
（あゝ江南の名家もかう暗愚では最後だ）
さう思つて、副使の和尚を顧みると、
（長居は無用！）
と、夕庵和尚の眼が、答へた。
そこで藤孝、夕庵の兩使は、箕作を早々に辭して、觀音寺山の六角本城へ向つた。
一方、觀音寺山では、佐々木譜代の家老たちが、集つて、當主の右衛門佐義弼の前で、大評定をひらいてゐた。
その人々はといふと——

日野の城主、蒲生賢秀。
その嬌子、鶴千代。
信樂大石郷の城主、近藤山城守。
水口の城主、建部采女正。
永原の城主、永原安藝守。
守山の城主、種村大蔵。
石部の城主、伊庭出羽守。
草津の城主、馬淵治部。
等々、あはせて、十八城の主ども。

（三）

『鶴千代は、顔を見せぬの。いかゞ致せしぞ？』
六角館または觀音寺館と、稱せらるゝ右衛門佐義弼が、さう訊ねたのである。
きかれた蒲生賢秀は、

『參つてをりますが、何分にも若輩ゆゑ、かゝる席には―』
と、答へると、義弼が、
『とんでも無い謙遜ぢや、あの寧馨兒を、若輩など云うては、さすがの冥利も、竭きようぞ、右京大夫』
『館』
蒲生は、遮つて、
『それこそ、飛んでもない事を仰せられる』
『これさ遠慮も、時と場合によるよ』
『いや、場合が場合ゆゑ、遠慮仕る』
『あいや蒲生、何を申すぞッ』
『軍國の一大事、肝要な御評議の席に、あのやうな無作法者がをりましては、館に失禮のみならず、お集りの方々が、氣を損じませう。劍術こそ多少は、年齢の劃には勝れてもをりませうなれど、生れついての偏屈が、近頃は餘けい昂じまして、自分の氣に向きませぬと、誰が何と申さうと、唇をへの字に結んだまゝ、金輪際、とんと口を利きませぬ』
賢秀は、さう返辭をした。

『ほう、それは初耳ぢやの、いつから其様に、無口に相成つた』
と、義弼が、信じかねるといふ顔つき。
蒲生の嬢男、鶴千代は、今年十三歳だが、幼稚い頃から將來どんな英雄になるだらうと、屬望されてきた少年だつた。そして近年は實にメキめきと、心身共に急劇な發育を遂げて、齢は十三でも、すでに凛々しい若衆ぶりを見せてゐた。
（あれこそ蒲生家の、あらゆる優秀な遺傳が、集まつて結晶したのだ。先祖、俵藤太秀郷の再來でもあらうか！）
人々は、さう思つたのだつた。
（あの、才氣煥發の鶴千代が、なんで左様な、無口の偏屈者に？）
右衛門佐義弼が、信じかねたのは道理だつた。
だが、鶴千代の父、賢秀は、
『この春頃からの一變化で御座ります』
と、答へた。
『ふうむ、不思議な變り方ぢやの。もしもそれが眞實とすれば、謂はゆる青春の憂鬱とでも、云ふのかな』

義弼は、眉をひそめた。
すると、賢秀が、
『ところが、仰有るが如くに、惱める戀の、鬱ぎの蟲とでも申すのならば、いさゝか可愛らしい點も御座りますれど、伜めのは、ふてぶてしい頑固、かたくなゝ根性の爲かと、存ぜられまするで！』
と、云つた。
『まさか』
『子を見るは、親にしかずの譬へ！』
『受けとりにくいての』
『いえ事實を申上げたので！』
『しかし兎も角、呼んで見ようぞ』
で、鶴千代は、この集ひの席へ呼び入れられた。
『一鶴千代。いちじるしく成人したのう』
と、義弼が言葉を掛けた。
鶴千代は、默禮したのみだ。
『だが近頃は、きつう無口に成つたといふの』

つゞけて義弱は、いろんな風に訊ねてみた。
しかし鶴千代は、全く一言も答へなかつた。

（四）

むろん、蒲生の若、鶴千代が、口を利く利かぬが、この集會の主題ではなかつた。
六角義弱は、訝しいとも思つたし、非常に物足りなくもあつたが、青春の憂鬱からにせよ、何にせよ、そんな事を研究してゐる閑時間は無かつた。
遠物見の者の報告によると、二萬八千の織田軍は、もう美濃から進發して、續々江北の淺井領へ入つて來てゐる。
そして、向背いづれかを問ひに來た細川藤孝と、瑞龍寺夕庵の兩使者に、返答を與へなければならない。
『いかゞ致すべきか？』
義弱は、諸將の顏を一巡と見まはして、
『和戰、兩樣の利害、得失について、各々腹藏なく意見をのべよ』

と、云つたが、諸將は、蒲生賢秀の發言を待つのだつた。
果代、蒲生の莊の地頭職として、江南における佐々木の旗下では、隨一の名家だし、武勇の實力にかけてもぬきんじてゐる。
『右京大夫』
と義弱が、促した。
で、蒲生は、その意見を述べるために、進み出て、
『信長いかに猛しくとも、永正の昔、大內義興が、義種公方を守護して都へ、攻め上りし勢にはよも及びますまい』
と、云つた。
『むゝ！』
わが意を得たといふ面持で、義弱が頷く。
蒲生は、續けて、
『當時、大內は、九州、四國の軍兵を引具し、山陰山陽の將士をもあまねく賂り倡し、申さば西國三十國が、一つになつて寄せたとも考へられまする』
『うむ！』

『さあ其時でさへ、佐々木御一家の軍勢を以つて、これに對抗し、將軍義澄公を輔佐し奉つた先例も御座りまする』

『おゝそれ、それ！』

『只今も、公方家の御爭ひとは申しながら、岐阜におはす公方は、出家遁世の御身をも顧みず、私かに還俗され、おふ氣なくも將軍の御職を望ませらるゝとも、信長以外、誰か與力仕らうぞ』

『その事！』

『信長は、尾張の田舍育ち、都の事情を知らず、近畿の形勢に疎う御座りまするによつて、あのやうな出家還りの方を、擔ぎ出した』

『まこと笑止ぢや！』

『しかし乍ら、めくら蛇、物に怖ぢず、畿内におきましての三好、松永殿御一黨の實力が、どんなに强盛であるやを知りませぬ』

『む！』

『存ぜぬだけに、鼻ツぱしは鋭う御座らうゆゑ、當方われ〳〵と致しては、油斷は相成りませぬ。身共の思案によれば、こたびの防戰は――容易くは御座りますまいが、しかし、決して覺束無しとは存ぜず』

蒲生は、開戰論者だつた。

しかも、この主張は、諸將たちの氣持を代辯するものだつた。

滿場一致。

『防戰！』

『防戰！』

『細川を追ツ返せ！』

『使者に御對面は無用ッ！』

『さうぢや藤孝と、坊主を、追ッ立てろ！』

（五）

織田軍は、いまや愛智川を越えて、南江州へ侵入した。

そして先づ、この愛智川南岸の村々へ放火して、氣勢を示した。

六角軍の作戰は、侵入軍を迎へ擊つて決戰することではなかつた。江南の人々は、織田が野戰の雄であるのを、何よりも怖れた。だから、平地で戰つては、とても勝算がない、と考へた。で、和田山

箕作、以下十八城に兵を構へて、敵を分散させ、「逸を以て勞を待つ」といふ戰略をとつた。

二萬八千の大軍も、十八城に分散さすれば、一城に對する攻圍軍の兵力は、平均一千五百内外でしかない。

一千や二千の敵に圍まれるならどの城にしても、半月や一月の凌ぎはつく。

籠城してゐる間には、京都から三好、松永黨の援軍が、來てくれるに違ひないし、敵兵を分散させて置いて、信長の本陣の虚を衝くといふ術もあらう。

さう考へたのである。

ところが、江南の人々が考へたやうな、そんな大甘な信長ではなかつた。

織田軍は、愛智川に一夜、野陣を張つたが、明くれば九月十二日、兵力の分散どころか、まるで洪水が、堤防を決潰させたやうな勢ひで、箕作城へ押寄せた。

たゞ箕作と和田山の聯絡を絶つために、美濃三人衆の名で通つてゐた稲葉、安東、氏家の三將と、明智光秀の兵を遣つたのみで、この派遣部隊を除いた全軍が、そのすべての威力を、箕作の一城へむけて集中したのであつた。

箕作城は、案に相違の大狼狽。

「こんな筈ではなかつたが！」

『此方は、分散作戦の積りだつたが、何かの間違へではないかの？』
『戯けめ！　間違へたのは此方だ。敵の知つたことかよ！』
『此方は、分散作戦だといふ事を、もつとよく知らせて置くんだつたな』
『馬鹿野郎！　そんな相談づくの戦争なんぞ、聞いた例が無い』
『無くつても新例をつくるのだつた』
所詮、防戦は覚束ないと思はれたので、大殿承禎入道は、一も二もなく足許の明るいうちにといふので、観音寺山の本城さして、逃げ出した。
じつに、なんと見苦しい態だつたらう。
こんなことで、信長の上洛を、よしんば半月にせよ一箇月にせよ、拒ぎ得ると思つたのは、全く認識不足の極端だつた。
これこそは井戸の中の蛙といふ奴であらうが、吉田出雲守の三千の兵で、承禎入道の脱出したあとの箕作城を護つて、防げるだけは防いだ。
しかし、抵抗は、四時間しか續かなかつた。
織田軍の攻撃開始は、午後四時であつたが、午後の八時には早くも落城。
あまりにも、あつ氣ない攻城戦だつた。

むろん、攻める方としては、あつ氣ない程が宜いに違ひないが。
働いた兵よりも、働く餘地の見つからなかつた兵の方が、はるかに多數であつたから、江南攻めの第一戦としては、力瘤の遣り場に困つたわけだ。
『信長公記』に、
「佐久間右衛門、木下藤吉郎、丹羽五郎左衛門、淺井新八、仰付けられ、箕作山の城攻めさせられ、申刻より夜に入り攻落し訖んぬ」
と、あるのが此日の戦だつた。

（六）

箕作山が陥落してから、二時間後には和田山も、派遣部隊に占領された。
明智光秀の――織田に随身して以後、初度の武功は、すなはちこの和田山乗取りであつた。
翌日――十三日は、早朝から観音寺山へ攻め掛かる姿勢が取られた。
箕作、和田山を占據した織田軍と、観音寺山との距離は、幾許もないのだから、
（たつた四時間で箕作を奪つたあの勢ひで、取ツかゝられては堪つたものでない）

と、承禎入道は、昨日喰つた泡を、早くも今日、ふたたび喰ひ直した。

それほど喰ひたいならば、一度に鱈腹たんまり食べれば宜かりさうなのを、わざわざ、十二日と十三日に、二度に分けて喰ふといふのは、しかも二度目のは、家督の嬢婦、六角の當主、右衛門佐義弼と共々に食すことにした所などはいかにも御念入りな承禎入道だつた。

『事こゝに及んでは、三十六計、逃ぐるにしかず。信長の鋭鋒は、これを避くるが專一で御座る』

と、義弼が言つた。

父が父なら、子も子であつた。義弼は斷じて不肖の子でなかつた證據には、さつそく午前中に、家重代の寶物などを、搬べるだけ搬ばせつゝ、觀音寺山を引き拂つて、石部の城へ、逃げ去つたのであつた。

名家も、沒落ぎはになると、かうした種類の人物が出る。

これでは、蒲生の鶴千代ならずとも、呆れて物が言へなくなる。

鶴千代は、全く世にもにがゝしい想ひで、父の賢秀に續いて日野の城へ歸つた。

日野城は、蒲生家累代の居城だ。こゝに歸つて賢秀は、籠城して織田の軍勢を引きうける積りで兵を還したのであつたが、途中、鶴千代は、父から話し掛けられても、一切口を開かなかつた。

『これさ、父にむかつても其方は返辭をせぬのか？』

賢秀は、音にひゞいた弓勢の豪傑だつたし、骨格も勝れた偉丈夫で、音吐も朗々と人を壓するほど大きかつた。

その大きな聲で、馬の上から喝鳴つたのである。

父の馬の尻尾に接いて、鶴千代の馬は歩いてゐた。

鶴千代の馬は、賢秀の聲に驚かされた態であつたが、鞍の上の鶴千代は、殆ど無表情な顏で、默りこくつてゐた。

城に戻つてからも、鶴千代は、まるで無言の行みたいな沈默を、おツそろしく續く根氣で、おし通したのであつた。

父が、いくら喝鳴つても、ちつとも反響が無い。父は、火のやうに激怒したが、憤れば憤るほど、鶴千代の唇は、頑强に締るばかりだつた。

賢秀は、根負けがして了つた。

それに、防戰の準備が急がれた。

思つた通りに織田軍の、押し寄せ方は、速かだつた。

寄せ手は、柴田權六、佐々成政、蜂屋頼隆の三將が率ゐる五千餘人の兵だ。

いよいよ今夜は、防戰——といふ時、

『お祖父上』
と、鶴千代が云つた。
數日間つゞいた無言の戒が、この一言で破れた。
祖父は、下野入道快幹。
この祖父の前に、鶴千代は坐つたのである。

（七）

快幹入道は、愛孫の顏を眺めて、
『鶴千代、何事ぢや？』
可愛くて堪らないといふ表情で訊ねると、
『私は、織田殿へ降參仕る』
と、答へたので、
『何、降參？　祖先以來、曾て一度も、恥辱を覺えぬ、弓矢名譽の我が蒲生の家柄ぢや』
『もしも祖父上が、父上と御同樣ならば私は、私だけで降參仕る』

『降參を、そなたは名譽と心得るのか？』
『はい、織田殿への降參ならば、名譽に疵はつかぬと思ひまする』
『たとひ織田殿であらうと――軍門に降るのは武家の最大恥辱ぢやぞ、鶴千代』
『さう思召すなら、どうぞ御勝手に、――鶴千代は、さつそく降參仕る』
鶴千代は、降參の一點張りだ。
弓前の恥辱どころか、名譽至極の降參だといつたのである。
『先祖の俵藤太殿の、百足退治などよりも、はるかに名譽かも知れませぬ』
『え、何がぢやツ？』
祖父の快幹入道は、覺えず叫んだ。
しかし鶴千代は、落着き拂つて、
『この降參が、で御座りまする』
『ふ、不埒なツ！』
愛孫ながらも、叱咤した。
『では、御免蒙ります』
『何？』

「これから降參仕る」
「た、戯氣ッ！」
「名譽の降參でござる」
「おのれ、血迷ひしか？」
今の言葉で云へば、異常な早熟後に、突如として現はれる、早發性痴呆の病的發作ではないかと、快幹入道は思つた。
この孫こそは、將來、天下に名を成す寧馨兒だと、期待をかけてゐたのに。
ところが、これだ。入道は、今まで生き長らへたのが、さも口惜しいやうに慨歎した。この事を、右京大夫賢秀に話して、父子諸共に眉をひそめてゐる時だつた。織田方から軍使が訪れて來た。
新公方からの上使として、神戸藏人。
信長からの使者としては、前田孫四郎利家。
上使に、神戸藏人が來たことには、理由があつた。藏人の夫人は快幹入道の姫で、蒲生賢秀の妹だつた。そして前にも云つて置いたやうに、信長の三男三七丸は、この蒲生から嫁いだ藏人夫人が生んだ姫へ、婿入をしたのであつた。
さうした密接な關係から見ても、最も適當な上使だつたといへる。

快幹入道と賢秀は、兩使——藏人・孫四郎から、順逆を說かれて信長への歸順を奬められた。
もともと暗愚ではない蒲生親子だから、かうして說かれて見ると翻然と悟るところがあつた。で、つひに開城して、押し寄せた柴田權六その他の軍勢を、迎へ入れることになつた。
そして、藏人・孫四郎の兩使が歸るのを送つて、賢秀は、嬌男の鶴千代と一緒に、信長の本營、箕作山へ赴いた。
「どうだ？」
信長は、賢秀よりも先に、鶴千代へ言葉をかけた。
すると、驚いたことには、鶴千代の返辭が實に振つてゐた。
「はい、鶴千代は、信長公の姫君のお一人を、妻に頂きたう御座ります。」

都入り

(一)

「ほう！」

信長でさへが、少しばかり唸つた。そして賢秀の顔を眺めて、微笑みながら、

「相當以上だのう」

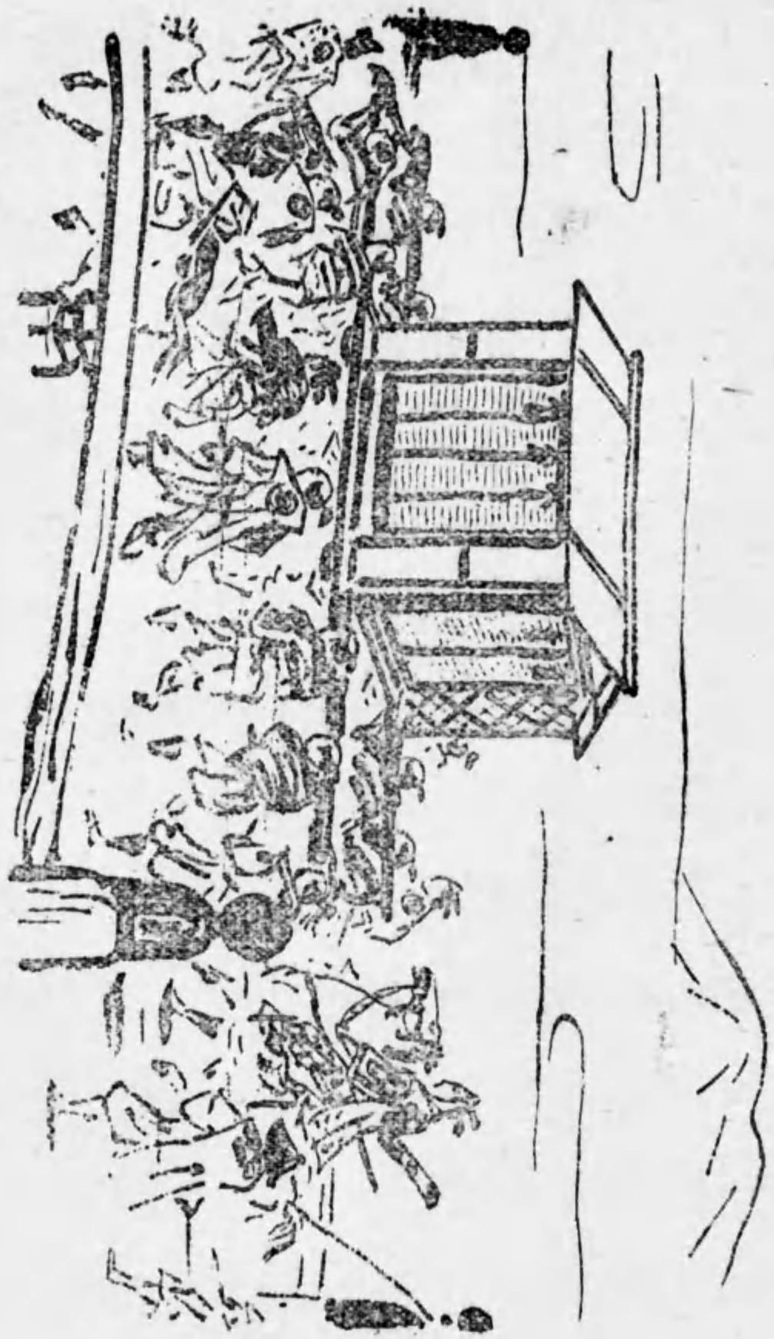
と、云つたが、賢秀にして見ると、その微笑が、實に、相當以上に氣味惡く感じられた。

なぜかといふと、賢秀は、稻葉山の齋藤龍興が、城を開いて、信長の軍門へ降人に出た時、信長がどんな態度に出て、龍興が、どんな取扱ひを受けたかといふ事を、よく知つてゐたからであつた。

全く、ヒヤリと背が、汗に浸つた。

低い聲ながらも、鋭く、

「お、おのれ降人の分際でッ！」



と、叱つたけれど、鶴千代は、父の言葉を聞き流して、信長へ、
「お許され、ませうか？」
と、云つたのである。
「善哉！」
信長は、無條件に氣に入つてしまつた。
「鶴千代！」
「はい！」
「生憎と、俺の娘は、まだすこし青過ぎて、食べ物には相成らん——いまが直ぐではの。但し、もうすこし色のつくまで待つか？」
信長は、眞顏で、さう訊いたものである。
「はい。待てと仰有るなら、待ちまする。但し、で御座いまする、私は、青過ぎても一向に苦しうは御座いませぬけれど——」
「わツはツはゝゝ！」
信長の爆笑に、ビクリツとしたのは賢秀だつた。怎うなる事かと案じ心で、
「これ、鶴千代ッ！」

と、激しく窘めた時、信長は、
「そなたは苦しう無いかも知れぬが俺の姫の方はな、苦しいよ——鶴千代、其方に遣はさうと思ふのは、まだ十歳にも成らぬで——本當に入梅前の梅の實だよ」
と、云つた。
鶴千代は、さも有難さうにお辭儀をして、
「入梅前でも、私は結構ですけれど——」
さう、答へたのが、また信長の氣に入つた。そして、賢秀に、傑れた伜を持つたと、激賞して、大層な上機嫌。
いかにも信長らしく即座に、自分の第二女を、鶴千代に嫁がせる事を約束した。
江南の最强豪、蒲生が歸順したので、その他の十數城の主どもは皆、風を臨んで降參した。そこで公方義昭も、二十一日には、美濃西庄を出發して、觀音寺山の信長の本營に到着した。
で、二十六日には、信長が、湖水を渡つた。
翌、二十七日、義昭も同じく、湖水を渡つた。
信長は、三井寺の極樂院を旅館としたし、公方義昭は、同じ寺の光淨院を座所として宿つた。
今や、京都は、全く指呼の近くに在つた。

信長が、本據の岐阜城から出陣したのは、九月七日だ。愛知川に野營したのは同十一日の夜であつた。それが、同じ月の末には、すでに南江州を討平して、湖西三井寺に馬を進めた。

殆ど半月の間に、江南を定めたのは、何といふ迅速さだつたらう。一度動けば、疾風もたゞならず——。

三井寺の陣へは、徳川の部將、松平信一が參着した。また、淺井長政も、小谷城から有力部隊を率ゐて、自ら出馬した。

織田軍の勢威は、京都を壓したのだつた。

（二）

徳川・淺井の應援軍が、參陣したために、上洛軍の兵力は、更に數千を增加して、總勢三萬二千餘人といはれた。

晴れ渡つたる晩秋の碧空に、林のやうに立ち連らなる旗差物が、色鮮かに反映し、山野を飾る紅葉に、一しほ輝く劍光、槍影。

山科、醍醐、宇治、田原の丘にも、原にも兵が、武者が、滿ち充ちて、路は兜と、鎧で埋まるのであつた。

織田軍すでに東郊に迫つたと聞いて、

（とても洛中では防げない。都は空にして渡して置いて、攝津、河内の諸城に立て籠つて、持久の戰ひをやる他あるまい）

三好・松永の將領たちは、さう考へたのである。

謂はゆる長期戰だ。じんわりと抵抗しようといふのである。

この守勢作戰が、どんな防備の姿勢をとらせたかといふと——

まづ、青龍寺の城には、三好三人衆の一人、岩成主税助が二千の兵で籠城した。

この青龍寺の城は、山城國乙訓郡神足の南、青龍寺村にあつて京都からの距離、二里だ。東西に桂川、淀川を廻らし、西北には長岡、柳谷の山が並び、南は男山と相對する景勝の地であつた。こゝはも と細川家の、在京中の里城ともいふべき場所で、藤孝も、永祿八年義昭を護つて漂泊の旅に出るまでは、この城に住んでゐたのだつた。

さてその次は、高槻の城だ。

こゝは京から六里半。攝州、島上郡に在つて、城の守將は入江左近、兵は八百。

それから芥川の城。

高槻の西北。同じ郡の内だ。三好北齋入道が、兵三千で立て籠つた。
次に、小清水の城。
武庫郡西宮の北にある。こゝには篠原右京進、一千餘人。
また、富田普門寺の城には、三好・松永一黨に擁立されて、十四代將軍と號した足利義榮が在城した。京都を棄てゝ、この城へ、つまり逃け込んだわけだが、これを守護する大將は、三好彦次郎。——豐前守之虎入道實休の嫡男がこの彦次郎だ。兵數三千餘人。だが苟くも將軍の守護兵としては、甚だ心細い兵力といはなければならない。何事もない時ならば兎も角、信長上洛といふ非常時に、これでは誠に心もとない限りだ。
池田の城には、池田筑後。
伊丹の城には、伊丹親興。
尼ケ崎の城には、豪勇の聞えの高い、二十二歳の青年城主、荒木村重。一千餘人。
さらに河内國・飯盛山の城には三好下野守政康が、兵二千で籠城したし、同國、高野の城には、三好長入道笑岩が、立て籠り、その兵力は、やはり二千だ。
こちらは信長——三井寺の極樂院で、
「まるでモグラモチの穴這入り見たいだな！」

と云つた。
これは、敵軍の守備作戰を評した言葉だ。
側で聞いてゐた猿面が、
「日の目が怖いといふ、地モグリ共ですよ」
と、口を出すと、
「地モグリは蚯蚓だ」
信長は、二十八日、都入りを號令した。
軍勢は、行裝きらびやかに、肅々と入京するのだつた。
新興織田の旗風は、闊はゞして京都を靡かせた。

（三）

京の人々は、
「一體どんなお方だらうな？」
「おや。お主は知らぬのか？」

『知らぬから、訊ねたのぢや』
『えらく物忘れの早い人よ。それ先年の、鐚車よ！　都ぢうが、お腹の皮を、あれほど縋らせて、お臍の宿替へを、散々させたでは無いか』
『あゝさういはれゝば、そんな事もあつたつけな。さうすると、矢張りあのお人か。えらうトン珍カンやな！』
『頓珍漢は、お主よ』
『どうも變だな。本當に同じお人かしら？』
『馬鹿だな。尾張の織田の、信長様が二人、三人あるものかよ』
『だけれど、影武者といふこともある。甲斐の武田の信玄公は、影武者を、七人も持つておいでぢやといふことだ。それに、俺の知つてゐる信長公は、天魔羅刹も、厄病神も、顔負けがして、面を向けかねるといふほどの豪勇無双な大將で、並の人間などは、地べたを匍ふ蟲ツけらとも思はない、お人だ。ところが、いつぞやの、鐚車は、オドケ過ぎてゐる。あれはきつと替玉だつたに違ひないぞよ』
『ほい馬鹿だな、お主は、替玉は影武者だし、影武者は似てゐる者ぢや』
『それが似てゐないから、變だといふんだ』
洛中、洛外の町々では、どんな憂目を見る事かと、町人共は、戰々兢々として、信長を怖れた。

何しろ京の町人どもにして見れば、こゝ百年も昔から、強い者といへば、近江の佐々木――つひ近年では、大和の松永大膳と、どうやら相場が決まつてゐたのに、その佐々木六角家の、十八城を三日の間に、攻め落した信長だし、また、その松永大膳久秀を、尻に帆掛けて、都から、三好一族よりも先に、眞ッ先かけて逃げ出さしめた信長だつた。
怖れをののく事に、無理はなかつた。
信長は、新公方義昭を擁して、今や都の地を踏んだ。公方の旅館は、清水寺。信長の旅館は、東福寺と定まつた。
信長の使番、菅の谷九右衛門が、馬を走らせて、東西南北に、分宿した諸陣の間を、布れてあるいたのだ。
何を布れて歩いたかといふと――
『洛中洛外に於いて、亂暴狼藉、押買ひする兵あらば、きつと討首にいたせ』
つまり、軍規の肅清命令だ。
昔から、大軍が都へ押し上つた場合、京の人々が最も惱まされ、苦しめられるのは、いつも決つて處女、人妻の凌辱や、無錢飲食、物品の掠奪などであつた。
信長は、入京第一日の劈頭、先づこの布告を出して、京都の住民を、さうした迷惑から免れさせよ

うとした。

今日の我々の常識からすれば、何でもない當然な考慮であるけれども、當時としては、全く劃期的な、斬新な命令だつたのである。

おまけに此の布告は、信長の布告だつた。

信長の布告だといふ意味は、見得や、形式ではなくて、まことに嚴重な實行を伴ふものだつたといふ意味だ。

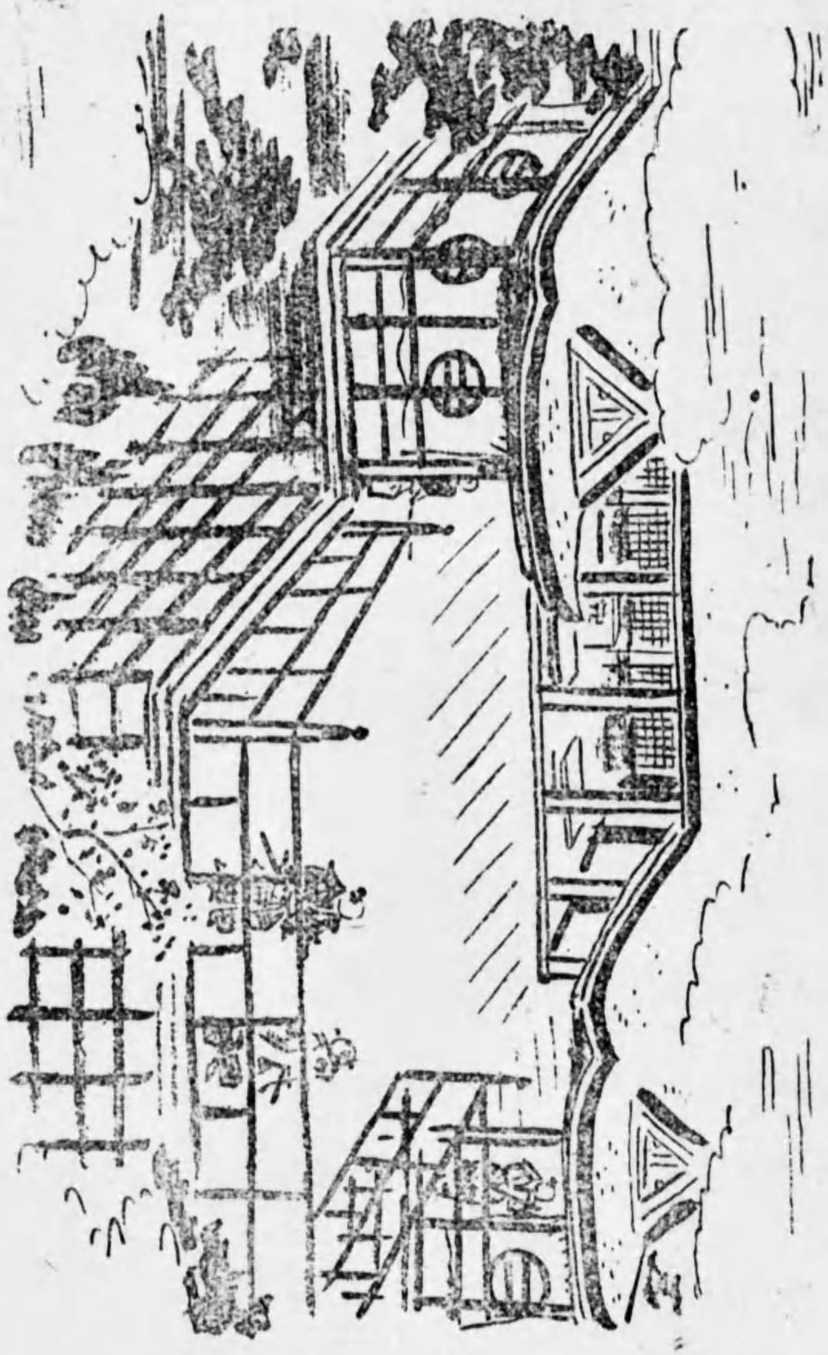
討首にするといへば、本當に首が飛ぶのだ。鴨川の水で晒した玉肌に、觸れたところで、胴から首が離れては引き合はないから、兵士どもゝ考へる。

三萬二千の大軍が、入京しても京の街は、何の被害も蒙らなかつた。

（四）

怎んな憂目を見るだらうと、案じわづらつた京都の民衆は、來ると思つた颱風が、その低氣壓を、どこかで消してしまつたかのやうな思ひで、ほつとして朗かな氣持ちになる事が出來た。

そこで、いろ〳〵な獻上物を持つて、信長の本營である、東福寺へ、上洛のお祝ひに參賀する人々



が、踵を連ねた。

その人々の中には、その頃、天下無双の名醫と稱せられてゐる驢菴、道三の兩人も交つてゐたし、連歌師の第一人者、紹巴も、やはり參賀者の一人だつた。

驢菴は、刑部少輔和氣利長の孫春蘭軒明親の次男で、またの名を通仙軒瑞策といつた。

累代の名醫、今半井氏といへば後の德川時代に於いても、名聲は大したものであつたが、この今半井家の先祖が、卽ち、驢菴だつた。

また道三は、これもまた酷くやゝこしい名を持つてゐた。

怎んな名かといふと、曲直瀨一溪道三雖知苦齋靜翁。

なんと素晴らしい名ではないか。

しかも、驚く勿れ、この素晴らしさにも飽きたらぬかのやうに、またの名を持つてゐた。すなはち道三は翠竹院とも號したのだ。

この道三を祖とした有名な醫家が、今大路家と稱して、今半井家と對立して、斯道の双璧と呼ばれたのであつた。

諸藝に名を得た人々や、裕福な町人や、顏役どもが、群參したのに對して、信長は側近の者が、

『あの樣な身分の輕い輩に、お自らお會ひ遊ばすには及びますまいに』

と、留めたにも拘らず、

『馬鹿を申せ。輕からうが、卑しからうが、みんな俺の顏を見たくて來たに違ひないよ。見せてやらうではないか』

さう、云つて、參賀に來ただけの者を、總て引見するのだつた。

(あゝなんと御闊達な御大將なのだらう!)

町人共は、すつかり感心して、忽ち大の信長びいきと成つてしまつた。

木下藤吉郎が、

『心得たものだ!』

首を搖ると、前田孫四郎が、

『何が?』

『大政治家だよ、館樣は』

『成る程な。あれでは御人氣が出るよ』

客殿では、信長が、

『紹巴、近う』

と、呼んだ。

紹巴は、扇子二本を、盆に載せて持參したので、それを差出すと信長が、
『其方の名も箆棒に長いのか？』
と、微笑した。
直ぐ前に引見した曲直瀬道三の名が、全くベラ棒に長かつたので物に驚かない剛腹の信長さへも目を白黒した揚句だつたのである。
畏まつた紹巴が、
『長くはございませぬが、連歌師紹巴と申す外に、寶珠菴ともまた臨江齋とも申し、姓も松村とも申せば、また里村とも申しまする』
と、答へたので信長は笑つた。
『いろ〳〵だな』
『はい色々でございまする』

（五）

『紹巴、そちは幾歳ぢや？』

『大永七年生れで御座りますゆゑ、今年四十二歳と相成りまする』
『厄年か、氣をつけろよ』
『は』
『光秀も連歌をやるが、知つてをるか？』
と、信長が、訊ねた。
『よく存じ上げてをりまする』
『どうぢや彼奴の技倆は？　あんまり上手ではなからうが？』
『いえ、どう仕りまして』
『下手糞といふ程でも無いのか？』
『とんでもない。連歌におきましても、實に秀逸な御技倆を、おもちで御座ります』
と、紹巴が答へた。
『はッは、厭に賞めるの』
『決して御追從を申すわけでは御座りませぬ。全く、わたくしども斯の道にのみ携はつてをりまする者でも、吟じ得ぬ境をも、物されまするで』
『ほう、そんなに吟ずるのか？　あいつ本當に器用な奴だよ。頭は大分きんかい禿げが、してゐるけれ

ど――』

信長の、口の悪さには、紹巴も少からず面喰つた形でゐると、

『碁も強いし』

と、信長は莞々笑ひながら、

『茶の湯も、相當玄人ッぽいし――本藝は鐵砲と、城造りだといふのに、附け足りの、末技の、そのまたおまけみたいな連歌の發句までが、大宗匠の其方に賞められるのだからいゝ加減あきれるよ』

さう云つたので、紹巴は、面喰ひから、すこしばかり不快な顏になつた。

信長は、事實、光秀の多藝多能に呆れたかも知れぬが、紹巴は今信長の言葉に、呆れざるを得なかつた。

光秀ほどの、傑れた人物を、きんか禿げだの、彼奴だのと云つて多藝多能も、ほめるのか、くさすのか、解らぬやうなことを、つけつけ言ふ。

（訝しな御方も、世にはあるものだ！）

紹巴は、本姓は松村、少年時代に奈良、興福寺の明王院で、喝食となつて、學修し、連歌を周桂に習つたが、周桂の歿後は、里村昌休を師として、名人の域に達した。そして和歌は、關白近衛稙家から、源氏物語は、三條公條から教を受けた文學の大家だつた。

（實に變つたお方だと、噂は聞いてゐたが……）

さう思つた時、信長は、

『紹巴。俺が、その末廣に、一吟いかうぞ』

と、云つた。

そして紹巴の持參した扇面へ、

二本
にほん手に入る今日の壽
日本

と、書いて、

『これに附けて呉れ』

『は』

紹巴が、それに附けた句は、

まひつるゝ千代萬代の扇にて

さう書いて、差出すと、

『む、これはいゝ！』

信長は、満足さうに、微笑するのだつた。
（やはりどえらく偉いのか知ら）
紹巴は、
（にほん手に入る）
と、心で繰返した。

（六）

末廣二本が、信長には、すつかり氣に入つた。
いふまでもなく、二本は日本に通じるからである。
だから、自分で早そく「にほん手に入る今日の壽」と詠んだ發句へ、「舞ひつるゝ千世萬代の扇に」と、紹巴に附け句させて、悦に入つたのであるが、信長の意氣は、この時すでに、日本全國を呑んでゐた。
しかし、悦に入つたからと云つて、お芽出度くタガを緩めて、顔の筋をハビさせるやうな男とは、まるで種類が異つてゐた。

『紹巴といふ奴は、相當なもんだな』
と、信長は、光秀にむかつて云つた。
『お眼識に適ひましたか、一介の連歌宗匠では御座りませぬ』
光秀が、さう答へると、
『末廣、にほんの宗匠だ』
信長は、微笑した。
『おゝそのお言葉、紹巴が承はらば、どのやうにか辱けなう、光榮に存じ上げませう』
そこで話題を轉じて、光秀が、
『ときに、館』
『なんだ？』
『信貴山から、使者が參りまして降參の申入れで御座りますが――』
『む、それで？』
『松永彈正は、前將軍義輝公を弑逆せる逆徒の張本で御座ります』
『だから？』
『張本では御座りますれど、前非を悔いて逸早く、歸順、降服を申出でましたゆゑ、此際と致しまし

ては、敢て舊惡を問はぬ方が、むしろ策を得たる仕儀かと存ぜられまする」

「すると、降參を許せと云ふのか？」

「いかゞ御賢慮？」

「藤孝や其方とは、違ふ」

「え、なんと御意！」

「おれは義輝將軍の仇討に、上洛したわけではないからな」

「お、それは拙者とて、心得てをりまする。藤孝殿はいざ知らず、かく申す明智めの念願は、決して足利幕府の再興では御座りませぬ」

「それなら矢ッ張り違ふ」

「は？　違ふと仰せらるゝのは？」

「そなたの、悪くない頭で、それが解らん筈がない。解らぬ振をするのは、恍けるのだらう？」

「これはしたり、何とて拙者が――」

「光秀。そんなら其方は、この俺が、自身で將軍になりたがつてゐる、と思ふのか？」

信長が、さう訊ねたのに對して光秀は、答へなかつた

（今、この問題には、觸れない方が、はるかに賢明だらう）

と、考へられたからである。

で、話頭を引き戻して、

「松永彈正の歸順の件は、いかゞ取計らひませうや？」

裁斷を乞ふと、

「許してやれ」

「畿内におきましての、安定勢力でござりまするゆゑ、これを利用致すべきだと、思はれまするによつて――」

「細ッかいことは、一切そなたに委すよ」

「大和一國は、松永と筒井とを、對立させることが、最上の治安策かと存ぜられまする故――」

「委すといつたら俺は委すのだ」

いゝやうにして呉れと、大和の處理を、信長は、明智に一任して了ふのだつた。

（七）

菅谷九郎衛門が、

『なんとも恐れ入つたる次第に御座りますが――』
と、全で平蜘蛛みたいに、恐縮の體だ。
『縮尻つたのか何か？』
信長は、訪ねた。
『はい、御禁制を破つた者が御座りまする』
『誰か、押し買か、錢無し遊興でもしたのか？』
『泥酔の揚句、通行の女子にむかつて、怪しからん振舞を致しましたので――』
『ふうむ、何奴が？』
『お仲間の、四郎五郎で御座りまする』
菅谷は、自分自身が酔ツぱらつて、猥褻行爲に及んだかのやうに蒼白になつてゐるのだつた。
『不埒な奴、四の五の云はせず、ふん縛つたであらうな？』
『はい！　縛めて御座りますが、いかなる御仕置に相成りませうや？』
『左様さな』
と、信長は少時考へてゐたが、
『この寺の前に、大木が突ツ立つてるな』

『御座りまする』
『あの大木の枝が、通路の方へ、つん出てゐる』
『をりまする』
『その枝に、五ろ四に架けるのだ』
『え、なんと仰言りまするか？』
『五ろ四に、吊るせと申すのだ』
『――ごろしと申しますると？』
『四郎五を逆さまにすれば五ろ四だ。渠奴を大木の枝に、逆さまに吊すのだ』
『あツ、左様で御座りましたか！　畏まりました、では早速、仰せのまゝに五ろ四に吊るしまする』
『亂暴な猥褻行爲などをすれば、この通りだといふ、見せしめに致すのだ』
信長は、逆吊るしを命じた。
承はつて、菅谷は退つたが、やがて犯人の仲間、四郎五郎は、東福寺の前庭にそびえ立つ大木の枝に、縛られたまゝ逆さまに吊るし下げられた。
まつたく宜い見せしめであつた。
兵に對する戒めとなつたばかりでなく、それは、毎日、群參する京都市民にとつては、安堵の保證

として、眺められた。
『あゝも御軍法が、正しいとはのう！』
『お有り難いことぢやて。これでは何の心配もなく日が過せる』
『道理で、ほんたうに柔和しいお士衆だ』
『こんなお士衆なら、幾萬人が、何年間、都入りをしてをつても、此方人らに、なんの苦勞も無からうといふものぢや』
『御軍法といふものは、おん大將がお定めになるのだ。だから、信長といふ殿様は、聞くと見るとでは、とんでもない違ひで、こりや當てことも無くお偉い御大將ぢやよ』
應仁の大亂このかた、京都市民は、軍勢の入京と聞けば慄へあがつた。兵火の衢となるのを怖れたのみでなく、兵の奪掠、殘害を恐怖した。
大軍が、都に滯在する期間の慘禍には、苦い〳〵經驗を、どのくらゐ重ねたか、解らないほどであつた。
だから、信長の軍が來る、と聞いた時、京都の民衆は、勝ちほこつた濃尾の强兵に殺到されたら、どんな荒らされ方をするだらうと生きてゐる氣持もしないほど、怯えた。
それが、なんと！

（八）

その頃、日本國中をさがしてもおそらく信長の領國くらゐ、治安の行き屆いた土地は、見つからなかつたらう。
那古野、清洲から、岐阜へかけて、婦人の獨り歩きにも何等不安がなく、住民は夜、鎖さずに眠ることが出來た。全く暴行者や、盜賊の心配が、なかつたといふのである。
これは、戰國時代には比類ない立派な狀態だつたと謂はなければならない。
で、信長は、軍隊の風紀の維持には徹底的な關心を持つてゐた。
しかし無論、自分の軍隊の風紀が、どんなに見事に維持されるかそれを試すために上洛した譯ではないから、入京の即日、先陣を命じておいた柴田、蜂屋、森、坂井の四箇部隊を以つて、青龍寺の城を攻めさせた。はじめ細川藤孝が信長にむかつて、
『あの城は、身共の祖父以來の居城で御座りましたのを、岩成めに横領された次第――されば拙者一手にて攻落し、舊に復したく存じまするが、この儀お許しを願ひたい』
と、云つたので、

『藤孝。おのれの兵數は？』
信長が訊ねると。
『二百には足りませねど――』
『二百では、いかに精兵でも覺束ない』
『しかし、明智か、三宅藤兵衛の兵百五十名を應援に、かして呉れると申しまするし』
『いや。三百五百では、城は落ちぬよ』
信長は、笑つて、先陣の四將に城攻めを命じたのであつた。
だから、四箇部隊のほかに、この城攻めには、細川の兵が加はつてゐたことは當然だ。
青龍寺はまた勝龍寺とも書く。
その位置は、すでに述べておいた通り、男山と相對し、大河を扼する形勝地である。
城將、岩成主税助は、防戰につとめたが、精悍な柴田權六や、森三左衞門などの敵ではなかつた。
また小人數ながら明智の兵も、逼兵だつたし、細川の兵にとつては大切な復讐戰だつた。
城は、一日しか保てず。
青龍寺の落城に引きつゞいて、攝津の諸城は、なんの他愛もなくバツタ、バタと陷ちた。
三好黨は、義榮を擁して、阿波に逃れた。

十月二日、信長は、芥川城に入つた。
入京してからわづか五日目だ。
『士力日々に新にして、戰へば風發する如く、攻むれば河決するが如し、とは夫れ、是れを謂ふか』
と、「信長公記」にある。
まつたくその通りだつたらう。
攝津の城々が、敢なく陷ちたやうに河內が、また同樣だつた。
すでに、大和の松永久秀も、筒井順慶も、來降した。
信長は、十四日間、芥川城に滯在した。
この滯在中に、山城・攝津・河內・和泉の國四つが、平定したのだつた。
信長が京へ戻つた翌々日、すなはち十月十八日には、公方義昭が征夷大將軍に補せられ、長い放浪の身が、參議左近衞中將に任ぜられた。
で、二十二日には、信長もまた參內して、遙かに天顏を拜した。
將軍となつた義昭は、この度の慶事に、觀世太夫を召して、十三番の能興行を催さうといつた。
すると、信長が、

『十三番は多過ぎる。五番ぐらゐに成されい』
番數を減らしてしまつた。

（九）

十三番の番數を、五番に、信長が減らしたのは、新將軍への、いはゞ一種の警告なのであつた。阿波公方の義榮は、疔を病んでゐたのが、橋津から四國まで逃げて行つた爲、病が俄に重くなつて、敢なく死んだ、といふ事だつたが、それでも三好一黨が、このまゝ屏息しようとは、思はれなかつた。だから、近畿の平定は、まだまだ假定でしか無かつた。

それに、信長は、朝廷に對し奉つて、しなければならぬ奉仕に、手を着けてゐなかつた。

『長き邊へ、御遠慮あるべきだ。五番でも多過ぎるくらゐで御座る』

で、高砂、八島、定家、道成寺、呉羽の五番だけと定まつて、觀世七代、元忠入道一安齋、その子八代左近大夫元盛が能を演じた。

內輪にといふのであつたが、それでも亂世の京都には珍しい大饗だつた。

『織田殿、どうぞ鼓を』

と、將軍は、所望した。

信長が鼓に堪能なのを、知つてゐたからである。

『御免蒙る』

愛想も、素ッ氣もない返辭だ。

そして、信長は、さつさと、自分の旅館へ、歸つて了つた、

將軍御所には、本國寺が宛てられてゐた。こゝは足利初代將軍尊氏の叔父、日靜上人の寺だつたといふ由緣もあつたし、それよりも信長が橋津芥川城から歸洛の後は洛東、清水寺を旅館にすることになつたので、本國寺なら、五條橋を渡つて、十八町——地理の便宜もいゝと考へられた。

『鼓を打つのが、厭だと、云はれたかと思ふと突如、清水のお宿へ歸つて了はれたのは、どうした歸かのう？』

細川藤孝が、心配さうに、和田惟政を顧みた。

『何かしら、餘程お氣に障つたことが、有つたに違ひ御座りませぬな』

と、惟政が、答へた。

二人の會話は、將軍の耳に這入つた。

（信長の機嫌を損じては、大變だ！）

義昭將軍は、さう思つて、
『織田殿の、昇殿と、任官を、早速に奏請いたさうではないか』
と、云つた。
『昇殿御奏請ならば、織田殿も、さぞかし御滿悅あられませう。おついでに、管領職をも、いかゞで御座りませうか？』
藤孝が、新將軍の意向を訪ねると、
『管領職では、不足であらうぞ』
『と、御意あそばすと？』
『副將軍、左兵衛督では怎うかの』
『おゝ、それならば！』
（光榮至極と、信長の殿も思召すであらう）
と、藤孝は思つた。
左兵衛督ならば從三位だ、新將軍の初叙は、やはり從三位、參議左近衛中將だつたから、殆ど同格なのである。
で、副將軍奏請の內意を傳して藤孝と、惟政とが、清水の旅館へ信長を訪問した。

ところが、意外！
『いやだ』
と、信長が、答へた。
『お氣に召しませぬか？』
『氣に入らん。足利幕府の副將軍などは、とんでもないことだ』
『まあさう御遠慮にも及びますまいに！』
『遠慮するものか。氣に入らんから、厭だと辭退申すのだ』

（十）

新將軍は、すつかり見當ちがひをした。
足利幕府の副將軍などは、とんでも無いことだと、信長が返辭をしたのを、
（織田は、もとは斯波の家老で、家柄が卑いので、謙遜したのだ）
と、思つた。
これは無論、義昭としては無理のない感じ方だつた。藤孝ほどの人物でも、

『御遠慮には及びますまいに！』

と、云つたくらゐだから、義昭が、背負つて了つたのは、當り前だつたらう。

そこで、義昭は、

『織田殿は、大恩人ぢや。副將軍を辭退したからと云つて、このまゝではをられまい』

色々、考へもし、藤孝らと相談も遂げた結果、二通の感謝狀を與へる事に決めたのだつた。

今度、國々の凶徒等、日を經ず、時を移さず、退治せしむるの條、武勇天下第一也。當家再興の大忠、之に過ぐる可からず。彌々國家の治安、偏に賴み入り候之外他事無し。猶、藤孝、惟政、申すべく候也。

永祿十一年十月廿四日　　御判

父　織田彈正忠殿

御追加

今度、大忠に依り、紋桐引兩筋、これを遣はし候。武功の力を受くべく、祝儀也。

御判

父　織田信長殿

右の、二通の感謝狀だ。

「父」と書いたのは、かなり振るつてゐる。

もちろん、父と尊稱して、報恩の意を表したものには相違ないけれど、信長は三十五歳だし、新將軍義昭は三十二歳だから、三つの差だ。兄なら恰度、頃合ひだが、「父」は、どう考へても、可笑しい感じがする。

しかし兎も角も、轉々とした羈旅の嫖客から、一躍、柳營の主となり得たのも、全く信長のお蔭だと思へば、よほど嬉しかつたのであらう。

いふまでもなく義昭の目的は、室町將軍家の再興、すなはち足利幕府の復活であつたが、信長の目的は、天下の統一と、近世的日本の建設にあつたのだ。

たとひ兩人が、一時は同床に眠るとも、夢は、まるで別な處へ馳せるのであつた。

だから、信長は、副將軍などは眞ッ平だと斷つたが、取るべきものは取らうとした。

なにを取らうとしたか、といふと、それは稅金だつた。

大坂の石山本願寺から、五千貫。

奈良の諸寺院から、千貫。

堺の商人から、これは大枚、二萬貫。

賦金を徴收しようとしたのだ。

本願寺と、奈良の寺々は、澁々ながら出すことになつたが、堺の大商人らは、

『そんな馬鹿な、筋違ひな大金が出せるか！』

と、命令を蹴つたものである。

そして、市街を繞る塹壕を深くし、城壁を補強して、防戰の用意を始めた。

だが信長は、將軍から「父」の字附きの感謝狀を貰つた翌くる日、京都を去つて、岐阜へ歸つてしまつた。

彼が、岐阜から出陣したのは、九月七日であつた。で、こんど凱旋したのが、十月廿八日だつた。たつた五十二日間に、江州の南半と、畿内五箇國を、平定した。

なんといふ神速さであつたらう。

嵐の前

（一）

徳川家康は、濱松へ移つて、

『濱松殿』

と、呼ばれることになつた。

西三河、半ケ國の主、岡崎の城主だつた彼も、今や三河・遠江二箇國の大守となり得たのだつた。

『東の方は、お身に頼むぞ』

と、信長に言はれた家康だ。

織・徳同盟によつて、東の方、すなはち今川氏と戰はなければならなかつたし、同時に、北方に蟠居する強大な武田信玄の勢力に、對抗すべき役割を課せられてゐるのだつた。

で、信長は既に、引きしぼられた弓弦から放れた矢の如き神速さで、上洛を遂げたので、家康もま

た東へ、その歩武を進める義務があつた。

この義務を果すために、家康はつひに遠州を攻め取つて、濱松に移つたのであつたが、さうなるまでの彼の道程は、決して生やさしい平坦さでは無かつた。

と、いふのは、一向宗徒の亂を平らげないことには、遠州へ手が伸ばされなかつたからである。

三河における一向宗一揆は、家康にとつては、實に厄介千萬な障礙だつた。

家康は、本當に手を燒いた。

彼自身の領地に、意外な內亂が爆發したのである。

一向宗については、前に述べて置いたやうに、その大きな武力をまづ頭に入れて考へなければならない。當初は、宗敎を保護する爲の武力が、やがて武力を保護する爲の宗敎、といつても宜いやうに變化した。

つまり、敎權の爲の俗權が、俗權を擁護するに都合のいゝ敎權に變つてきたのだ。

日蓮宗なども、多少の兵力を持つてゐて、一揆も起せたし、戰爭も出來た。例へば、管領細川晴元は、京都の二十一箇寺の日蓮宗の兵を集めて、本願寺を攻めさせたことがあつた。しかし、日蓮宗は一向宗のやうに、寺院の相續が世襲でないから、民心を統べるには具合が惡い。

その點では、あらゆる宗派のうち、一向宗が最も强味を持つてゐた。一番凡俗的、世間的で、喜捨

金を蒐集する能力が、非常にすぐれてゐた。金が無ければ、兵を養へないし、兵力が乏しければ、土地の橫領が出來ない。

一向宗は、中興の蓮如上人この方、じつに儼たる物質的な勢力を有することになつた。

蓮如が築いた大坂の、石山本願寺の城廓は、天下無双の要害で、見物に行つた信長に、ダラダラ涎を垂らさせるほどの、金城湯池だつた。

そして江州の北部は、いはゞ本願寺の兵站部ともいへる場所で、淺井、坂田、伊香の三郡にわたつて、城主以上の力をさへ持つ謂はゆる大名坊主が、十箇寺院あつた木曾川河口の、長島本願寺に關してはたびたび云つたし、加賀の一向宗のこともすでに述べた。で、三河だが——

佐崎の上宮寺
針崎の勝鬘寺
野寺の本證寺

この三つの寺が、

『守護不入』

と、稱して、獨立國の體を保持した。

守護不入といふのは、納稅もせず、法令にも服さないのだ。

領主の家康に對して、治外法權を主張して、譲らなかつた。
『不埒ぢや。おのれ、退治てやる』
家康が、さう決心した。

（二）

『德川殿は、佛敵だ』
『一揆退治とは片腹痛し。あべこべに佛敵を打倒してやる』
『三河の國の昔の屋形、吉良殿を戴け』
『吉良様なら舊家だ。駿河の今川家にも劣らぬ名門ぢや』
『さうだ、われ〳〵一揆の總大將には、吉良様がいい』
門徒たちは、曾て東條の城主だつた吉良義諦を擁立した。
綱ひは蕭牆の内から生じた。
これを俗に云へば、脚下から鳥が、たつたのだ。
德川家中の不平分子が、翕然として、針崎、佐崎、野寺を中心として集結した反徒一揆へ走つた。

である。
この不平分子といふのは、他でもない。今川黨だ。
今川黨といふのは、德川家中では、相當な數と勢力があつたのだ。つまり、織田との同盟を潔しとせず、家康夫人、瀨名姫の實家たる駿河の今川氏と握手するのが、三河としては本當だ、と信じた人々――それが今川黨だ。
妙な事には、これらの今川黨に一向宗の信者が多數を占めてゐた。
『譜代の主君でも、佛敵となればわれわれは、弓を引かなくてはならん！』
『さうとも〳〵。君臣は現世限りの契りだ』
『しかるに佛祖如來様は、これこそ未來永劫お頼申さにやならんぞよ』
一揆は、今川黨の應援を得て、勢ひを増したのみでなく、熾烈な宗教心、信仰心が、命を歡んで投げ出させた。
一揆の兵どもは、お有難く思ふ僧侶に、手づから書いて貰つた文字幟や、木の御札を、差物に押し立てたり、あるひは兜の眞甲に附けたりして、じつに勇敢に戰つたのであつた。
その文字といふのは、
『進足者、往生極樂世界、退足者、墮落無間地獄』

と、書かれたのだ。
信仰の力は懦夫をも、豪傑にした。百姓も商人も職人も、みな立派な闘士と化した。
進めば死ぬに決まつた場所でも進んだ。それは極樂往生のためだつた。
『それ進め、進め！』
『退けば、無間地獄へ墮ちるのだ！　眞逆さまに、地獄へ墮ちるのが厭なら、退くなッ！』
かうなれば、強い。頑強だ。
しかし、一方、家康の頑張は、反徒以上一揆以上に頑強だつた。
それは、幼年竹千代このかた、培つた驚くべき頑張であつた。
もしも、家康が必の弱い大將なら、一揆の要求を容れて、妥協したかも知れない。だが、家康はかくなる以上は、根本的に退治しなければならぬと覺悟をした。
精神的に勇敢だつた許りか、家康は、いつも戰場で、眞先に陣頭へ馬を躍らせ、槍を揮つて敵を突いた。
馬術にかけても、武技においても、家康は達人だつた。戰國時代の武將たちを通じて、家康の個人的勇氣と、その武術とは、たしかに第一級に伍すだけの資格があつたらう。
一揆退治の家康には、逸話が山ほどある。だが、それは割愛しなくてはならない。なぜかと云へば

これについて語るのは、本筋から外れた道草を食ふことだ。
こゝでは唯、家康が、抜本的に根こそぎ一揆を、叩き潰したことを云ふだけに止める。

（三）

『徳川殿の一揆退治が、悪かつた。あれが禍根であつた』
さう、斷定したのは、明智光秀だつた。
『禍根？　わざはひの根ですか、飛んだこツた、えひヒヒヒヒ！』
聲を、眞ツ黄色くして笑ふ木下猿面。
『これ木下ツ、何が可笑しい？』
『えひヒヒヒヒヒ！』
『また笑ふのか？』
『ヒヒヒ、御覽の通り、えひひひ、可笑しいから笑ひますです』
織田の本城、岐阜の千疊臺の館内。部將や諸士の控へ室である廣敷の一隅だ。
中庭には、うらゝかな陽の光。

もう櫻の梢が、かすかながら薄らに仄紅が、漂ふやうに見える。
元龜元年の花も、十日あまりも經たば、チラほら咲き始めようと思はれるのであつた。
光秀も、藤吉郎も、互に相手を、
（人の買ふほどには！）
と、感じながら話してゐる。
どちらも、實質の値打を、幾割引かで眺め合つてゐるのである。
そこには、佐々成政がゐた。前田孫四郎がゐた。他にも五、六人面白さうに聞いてゐる。——で、光秀が、
『木下とも覺えない。あゝも根こそぎ叩きのめされては、一向宗ならずとも怒る。大坂の石山本願寺はじめ、長島御坊、加賀の金澤御坊その他の同宗一門徒の悉くが、佛敵は德川殿——ひいては當岐阜の織田館こそ呪はしいと、瞋恚の呪咀を向けて來たのが、どうして禍根でないといへる？』
『ほい云へますですとも、あべこべの福根だ』
『莫迦な。一向宗の本山末寺の憤怒が、つまり越前の朝倉を動かしたのぢや。かく申す光秀は、朝倉の祿を食んでをつた間に、本願寺と越前とが、いかに密接な關係を持つかを知ることが出來た。朝倉は、大坂本願寺と親戚の間柄だ。のみならず、加賀、能登の二ケ國は、いはゞ一向宗の領地も同樣ぢ

や。先年、加賀から攻められようとした時、朝倉は、本願寺御門跡のお扱ひで、漸く無事に過せた。その折の義理合ひから申しても、こんどの陰謀には、相談に乘らねばなるまい』
明智が、さう云ふと、猿面はプツと吹き出して、
『なにも朝倉の祿を、食まずともですね、かく申す猿などはです、そのくらゐなことは、オギヤツと云つた時から知つてゐますですよ、ですから朝倉の動くのも、やはり有難い福根だと思ひますです』
と、猿面一流の語法だ。
『なにを愚にも附かん。朝倉が動けば、必ず叡山へ働きかける』
『それは、働きかけますよ、朝倉は、叡山の大檀越ですからね』
『叡山は、王城鎭護の傳統をもつ、實に怖るべき大勢力ぢや。もし、比叡山、延曆寺が、敵側に廻らば——』
『結構ですよ、それも』
『なに、それも結構とは、驚くの。一體けふの木下は、どうか致してをる。叡山が、朝倉と共に事を起せば、淺井殿とて、傍觀は出來ぬ位置ぢや。鴻恩ある朝倉のためには、いかなる犧牲も、忍ばねばならぬ淺井家ぢや。當館とは、市姫樣といふ楔で繫がる義兄弟の、間柄でおはせばとて、命の親の朝倉殿を、當館に見替へる譯には參るまいし、いざとなれば——』

『えヒヒヒひひ！』
と、猿面の奇聲が、光秀の言葉を中斷した。

（四）

『それに、もう一つ――悪いことには』
光秀は、佐々成政と、前田利家の顏を、當分に見分けるやうに眺めて、
『いや、一つどころか、なほ幾つも悪い事がある。朝倉の義景殿の御病氣が案外に恢復したことが、卽ち、その一つぢや』
と、云つた。
朝倉義景の神經衰弱が治つて、新將軍擁立の功を、織田に奪はれたことを、深刻に殘念がつてゐるのだつた。
『それから、長島の庇護を受けてをつた美濃の舊主、齋藤龍興が、甲斐の武田に食客となつて、甲府住ひをしてをる事が、その一つぢや。さらに憂ふべきは、新將軍家が、表面は兎も角、陰では當信を快く思召しては在さぬといふ一事ぢや』

光秀は、猿面が笑はなくなつたので、視線を戻して、
『そのうへ、三好の一黨が、將軍家への敵意を棄てゝ――』
と、言つた時、
『ひヒヒヒ、どれも是れもが、みんな結構ですよ』
藤吉郎は、またも、はぐらかした。
はぐらかしたと云ふよりも、自分の思ふ通りを、彼の獨特の表現法によつて、現したのであつたが光秀は、
（悧巧なやうでも、此奴、下賤の出だけに、大局の動きとなると、一向に目が屆かぬ。これが鼻元悧發といふのかも知れん）
と、思つた。
果して、諸國諸勢力の情勢は、光秀のいふやうに、信長にとつて一々不利で、險悪で、極端に憂ふべき狀況であつたらうか？
それとも又、猿面藤吉郎の考へたやうに、どれも是れも、至極結構で、織田氏へは眺へ向きな形勢だつたであらうか？
悲觀か、樂觀か？

いづれが是か？

いふならば、光秀の悲觀說にも道理があつたし、と同時に、藤吉郎の樂觀說にも、亦眞實な妥當性があつた。

光秀が觀察した通り、信長の領國の周邊は、全く、寸時も油斷のならない狀態だつた。

反信長同盟の大同團結が、陰暗裡に締結されてゐたからである。

ところが信長は、甚だ暢びりした顏で、

『家康を上方見物に伴れて行く』

と、云ひ出した。

『あの男、まだ上方は知らんのだから、きつと面白がるよ』

濱松の德川家へは、

『できるだけ堂々と多人數で——』

といふ註文。

勸誘の使者は、實に重大な密使であつたが、それは飽くまで機微だつた。

二月廿五日、信長は、濱松から來た家康と、相携へて、岐阜を發つた。

家康との間に、祕密な相談を遂げた事などは、噯にも出さずに、廿六日には、江州の常樂寺まで行

つて、その寺を旅館に、佯々尻を落着けて了つた。

月が變はつて、ポツぽつ花が咲き初めた三月三日には、江州中の角力取を、集めて、常樂寺の境內で盛んな大相撲を催した。

この大相撲の興行も、

『濱松殿御馳走のため』

と、いふのであつた。

（五）

大湖の岸は、聯蕩と春霞み。

いとも長閑に、信長と家康は、相撲を觀たのである。

相撲は現代では國技などと呼ばれて、兩國橋畔、國技館本場所の盛況は、スポーツ愛好者の胸を躍らせるが、そもそも此の競技の發達は、信長のお蔭を、大いに蒙つてゐる。

むろん、相撲は、ずつと古代、野見宿禰このかたのものだし、信長のお蔭が無くても、發達したに違ひないが、信長が大好きであつた爲に、その發達の促進されたことは確かだ。

當時　江州には、專門的な角力取が、相當な頭數を揃へてゐた。たぶん、職業力士の發祥地は、江州だつたのであらうが、信長は、彼等を、常樂寺の境内に集めて、技を競はせた。

のんびりと、相撲見物に興じてゐる信長・家康に、やがて近いうちに北國へ大軍を動かす腹があらうとは、怎うしても見えなかつた。兵士どもは、

『じつに好い春ぢやの』

『暢氣な旅行ぢやて』

『命が、だいぶ延びさうだよ』

『これで都へ行つて初物でも賞翫した日には、延びた上にもう七十五日、延びようと云ふものだ！』

『延ばす積りで初物を、うつかり食べて見ろ、どろしだ！』

『どろしツて？』

『四郎五の逆だ』

『あゝあれか』

『言はれてから思ひ出すやうでは遲い』

『だけど、今度はまさか、逆さ吊しにも逢ふまいぞよ』

『なぜさ？』

『だつて、あの時と、今度では、まるきり御大將のお意氣込といふのが、違ふ、先度は敵を討つためのの、戰ふための御上洛だし、今日びのは御遊山だもの、大きに違ふよ』

『違つて呉れりあ、命の洗濯が出來るがのう』

『やい、肝腎な相撲を、なぜ觀ないんだ？』

『俺あ早く都入りをして、しつくり自分が取組みたい』

『阿呆ちき！』

京都へ入つたのは、三月七日であつた。信長の軍律は、しかし相變はらず嚴しかつた。泰平樂に見える都入りながらも、多數の兵をつれて入京した以上は、やはり戒律を嚴重にしなければ、治安上、面白くあるまいと、さう、信長は考へたのであつたが、兵どもは、精力の吐け場に困つて、徒らに脾肉の歎を、洩らす外なかつた。

信長と家康とは、仲よく一つ旅館に泊つた。この時の旅館といふのは、富豪で茶人の半井驢庵の家だつた。

部將たちは、

——お物數奇だなア！

と、驚いたものだ。

信長は、
『御修理の、やうやく出來上つた御所を、まづ拜んで參らう』
と、家康に云つた。
禁裏御所は、景觀をすつかり改めてゐた。
宿に歸ると、
『堺から、名物の茶器を、うんと徵發して來いッ』
と、信長は、松井友閑に言附けた。
(友閑ならば、目が肥えてゐるから——)
さう思つたのである。
命じられた松井友閑は、丹羽長秀と共に、さつそく堺へ出掛けて行つて、豪商たちの家々に祕藏されてゐる名器を、探して廻つた。
『献上した方が、爲になる!』
さう、云はれると、豪商たちは薄氣味が惡くなつた。

(六)

なぜ、堺の富豪たちが、氣味わるく感じたかと云へば、この前、信長の命令を素直に聞かなかつた爲、散々な目に逢はされたからであつた。
つまり一昨年だが、永祿十一年足利義昭を擁して信長が上洛した時、堺の市へ、賦金二萬貫を申附けた。
二萬貫といふ大金だから、堺の金持れんも、納めるのが厭だといふので、市街を繞る濠を深くし、城壁を堅固にして、
『奪れるものなら、奪つて見ろ』
と、反抗したのであつたが、その結果は、從順に納金した方が、遙かに增だつたと、後悔しなければならなかつた。
最初に割りあてられた賦金の、倍額を、結局は納めることになつた。この苦い經驗を思ふと、
『お望み次第の品を、どうぞ御持ち歸り下さるやう——』
さう、御無理御尤も、御受けをするほか無いのだつた。

惜しくて堪らぬ名器だが、なんとも致し方が無い。

『相手が悪い。どうも信長公といふ人は、われ〳〵の苦手ちやのう！』

苦手にしろ、甘手にしろ、

『信長公は、長い物ぢやよ！』

『お名からして、のぶ長だ』

『長い物には、捲かれるほか無いわさ』

觀念することに決めて、巨富の豪商たちが、金に飽かせ求め覓めて置いた名物——異國本朝の珍品を、献上した。

中にも、一番目さましかつたのは、

「松島の壺」

「紹鷗茄子」

これは、今井宗久の献上品で、天下に隱れのない名物だつた。

この今井宗久は、名を彦左衛門久秀といつて、江州佐々木の支族であるが、堺に移り住んで、貨殖の事業を興して、巨萬の富を積み茶道を武野紹鷗から學んで、その婿となつた。そして、第一流の宗匠ともなることが出來て、宗久と號した。

だから、彼は、その富力においても、また茶道にかけても堺の代表的人物だつたのである。

「それにしても織田館は、おびたゞしい名物什器を御徵發なされて、そもそも何に遊ばすのだらう」

「怎う遊ばさうと、人の仙氣ぢやわしらが頭痛に病むことかよ」

「だけど、信長公といふ方は、ずゐぶん、チヤツカリしていらつしやるからのう、人の鱠鼻褌で、相撲をとることでは、本當に天下の一人者で御座るよ」

「はてな？　松島の壺で、どんな相撲がとれるか知ら？」

信長が、堺の商人たちから、人犢相撲の名人にされてしまつたことには、理由があつた。

それは他でもない。信長は、堺から徵集した賦金四萬貫を、極めて有意義な、最も効果覿面な事業に使つたからである。

では、どんな事業に使つたのか？

それを云ふ前に、一言しなければならないのは、信長が、堺の獨立——即ち治外法權的な商權を、天下統一の妨げとなるものと、睨んだといふ事である。

小獨立國としての堺の存在を、信長は、

（許すべきでない）

と、考へたのだ。

（七）

長くも、禁裏御所、御造營の費用を、

『まづ、堺の四萬貫で、おん賄ひ申上げよ』

と信長は云つたものである。

他所への賦金を、當てにしなければならぬ程に、信長は、貧乏ではなかつた。

否々、貧乏どころか、信長は甚だ裕福だつた。

すでに云つたことだが、濃尾平野の地味の膏沃さは、日本全土を通じて屈指だ。この平野を本據として、江州の南半、伊勢の北半をも領有し、さらに畿内へも勢力圏を伸ばした信長の殷富を以つてすれば、御所御造營の費用なども、勿論、容易なことであつた。

それにも拘らず、

『堺の税金で』

と、云つたのは、信長に獨特な考へが、あつたからだ。

どんな考へか、と云ふと——

堺は、帝都からどれ程もない距離にありながら、まるで、朝廷の御式微、禁裏御所の御荒廢を、知らぬ顔に――但しこれは敢て堺だけにかぎつたことではなく、諸國の豪族、勢力者の殆ど大多數が、皆さうであつたに違ひない――けれども、知らぬ顔に打過ぎたといふことは、信長として許し難く思はれたのだ。

そこで、豪商が軒を並べ、巨富が甍を競ふ堺に對して、税金を納めることを申しつけたわけだが、これは、天下への見せしめでもあり、又、示威でもあつた。

『花盛りだし――』

と、信長は家康の顔を眺めて、

『御所の御普請も、落成したし、いやに意地ッ張りの堺の奴等も、近頃では、すつかり骨を軟ッこくして、松島の壺だの、紹鷗の茄子だの、といふ名物まで、惜し氣もなしに、吐き出すやうに相成つたでの』

さう云ふと、家康は微笑して、

『惜し氣なしでは御座るまい――ずゐぶんと、惜しかつたに違ひ御座りませぬよ』

と、言つた。

『そこで――』

信長は意味ありげに、妙な笑ひ方をした。

『おや、何をお笑ひなさるゝ?』

家康が、訊ねると、

『そこで、女ぢやがの?』

『女とは?』

『まだ、あと五十日位は滞在することにならう』

『と、女子で御座るか?』

決して女を嫌ひではない家康が、くすぐつたさうに、顔を歪めた。

『國から、呼ばうと思ふのだが――御身は、瀬名殿とこの節、仲が香んばしくないと聞いた。どうなさる?』

と、信長が云つた。

『あ、その事で御座つたか』

『わしは、奥を呼びよせようが、御身は何女なりと、御勝手になさい』

『これは〳〵、御親切に!』

二人は、いとも睦ましさうに、そして、和やかに微笑み合ふのだつた。

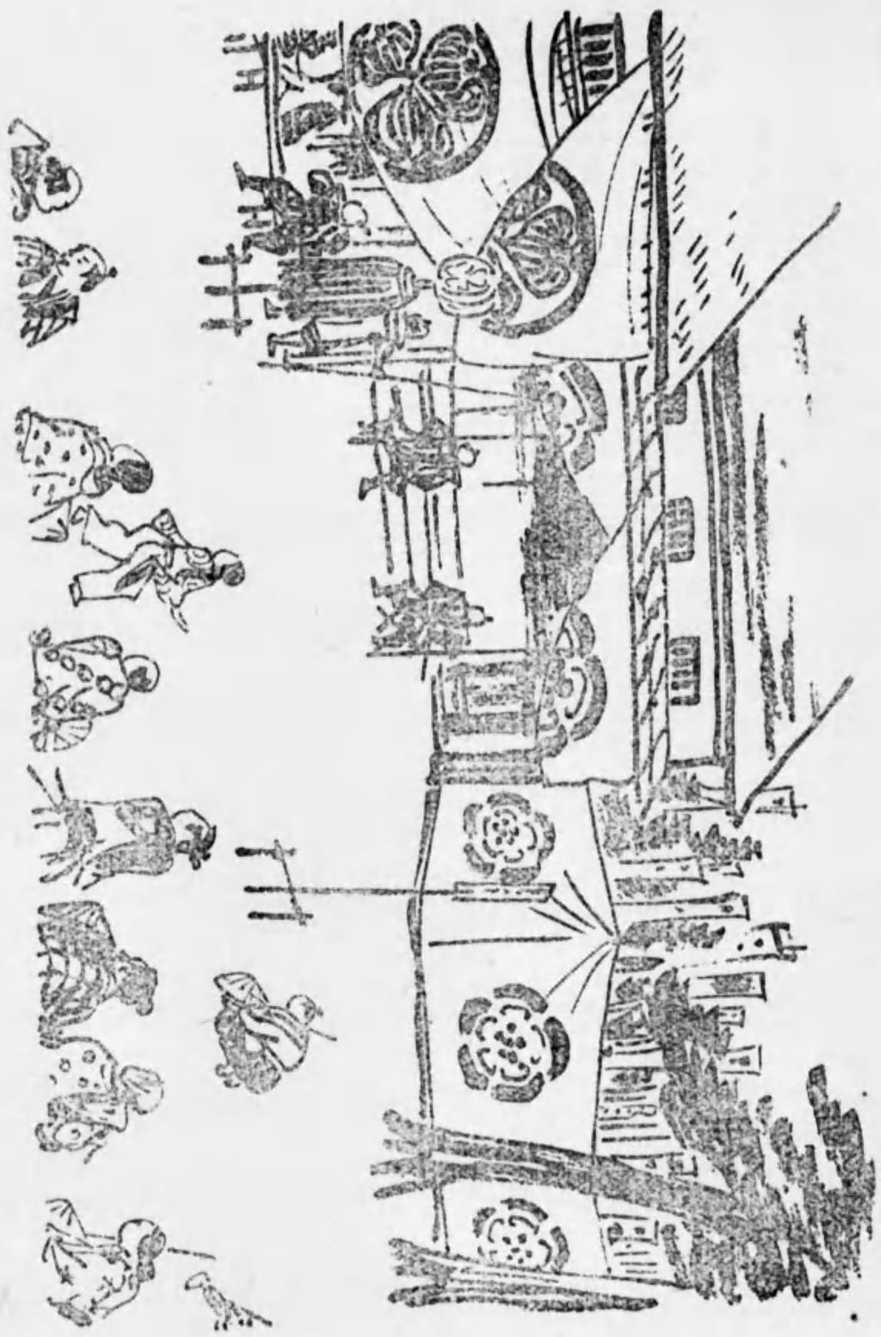
濃姫夫人が、岐阜から呼びよせられて、京都へ着いたのは、三月の中だつた。
家康も亦、遠慮を拔きにして、濱松から、愛妾を呼びよせた。
兩大將が、のんびりと妻と妾とを、都入りをさせたので、近く風雲が捲き起らうとは、誰もが思はなかつた。

金ケ崎退陣

花から青葉へかけての、中原の平和は、やがて來るべき大暴風雨の前の　凪だつたのである。
穩かな空氣が、忽如として搖らぐ。
――信長・家康が、京を去つたのだ。
京都を去つて、坂本の城に還入つた。四月廿日だ。
坂本の城主は、森三左衞門可成であつた。
森は、平手中務の諫死このかた、久しく主君信長の側役をつとめた勤勞によつて、坂本の城主に封ぜられたのが、一昨年。で、この坂本で、信長・家康は、朝倉退治の勢揃ひをしたのだつた。
神速を尙ぶ信長は、その日のうちに坂本を發つて、翌廿一日には、若州の熊川に着。
松宮玄蕃允の館に一泊。

二十二日は、佐垣の粟屋の城に宿つた。
織田軍の先遣部隊は、あくる日國境を越えて、越前の敦賀郡へ侵入した。
二十五日には、信長も、本陣を敦賀の手筒山の麓へ進めて、山頂の敵と對峙したのであつた。
北國の民衆は、初めて見る織田の軍裝の、華麗なことに、膽を、上げたり、下げたりした。

『てへえ！　素敵、素敵ッ』
『敵ながら！　豪勢なもんだなあ！』
『まるで、鬼神の天下りみたいぢやないか！』
『あの朽葉色の大幟は怎うぢや！　二本、三本――五本、十本――二十本ぢゃー』
『うふわア！　同じ色の具足ぢや！』
『槍の長さも、揃ひの揃へだ！』
『槍は三間柄――朱槍揃へは、驚かんが、緘色の揃ひ具足は、おどろくのう！』
一千人の兵の、同じ緘色の、揃ひ具足は、まづ何よりも北國民衆の心を寒からしめた。
殷富天下に冠たる、軍裝である。
信長は、紺地金襴の包み具足を着て、冠つたのは、白星の三枚兜だ。
跨つたのは、「利刀黒」と呼ばれた駿馬。金造りの大太刀。



『あれだ、あれだ、敵の御大將だ！』
と、越前の民衆が、目を見張つたばかりでなく、織田の陣營でさへも、老人どもは、
『あれぢや、あれぢや、俺あ涙が出てならんのだ！』
『なぜ泣くのだ？』
『考へても見さつしやれ！』
と、根締まり聲を、わなゝかせた。
『どう考へるのだ？』
『あれよ。兜が重いと仰有つたお殿樣ぢや！　鎧は暑いと仰有つたお殿樣ぢや！』
『うむ！　それか〳〵。全くお變りに成れば、なつたものぢやのう！』
『だから、俺あ、泣けてくる！』
『これさ路傍の、百姓どもに、泣き顏を見せるのか？』
『見せるとも、構ふものか嬉し泣きだ』
いふに云はれぬ懷しさで。過去の日が、若かりし頃の信長が、彼等年寄どもの頭に、甦生つた。
そして輝かしい期待が、無限に、彼等の行手に展がつてゆく。
手筒山を攻める織田軍の先陣は、柴田勝家、第二陣は、明智光秀。

柴田の先陣は、毎度のことで、すでに吉例になつてゐたが、明智の第二陣は、越前の地理と事情に明るい點で、先遣部隊に加へられたのであつた。
撞ツと擧がる鬨の聲が、まづ手筒山の翠巒を搖がせた。

（二）

小谷の城の、大手門は、門扉を開いて、群がる兵を呑み込んだり吐き出したり。
門の外も、內も、眞晝を欺くほど明るかつた。
大篝火の光に、闇が照らされてゐるのだ。
ふんぽオー、ふんぽオーツと鳴りひゞく法螺貝。
非常召集の貝の音で、武者震ひをしながら馳せ集ふ兵士の武器が物々しく、闇の中から、松明で映し出される。
人が喚くと馬が嘶く。
『わあーツ、また注進、注進！』
『御注進だツ！　それ、開けろツ』

『路を塞ぐなッ！』
闇夜を闇雲に走つて來た騎馬注進が、大手の門で馬を乘り棄てた。
馬の轡を取つて、松明を驕しつゝ徒歩走せで來た兵が、途中で後れて了つたのだ。
『よくぞ川へも、田圃へも、嵌まらずに驅り着けた！』
『一心不亂となれば凄いものぢやよ』
『これさ、そんな事よりか、敦賀の形勢は怎うなんだらう？』
『敦賀も敦賀だけれど、氣にかゝるのは御城内だ。まだ御ふんぎりが附かんのかなあ』
『附かんからこそ、この體裁だ』
『人寄せばかりで、御出陣の模樣は一向、氣も無いではないか』
『この期に及んでも、まだ御決斷が鈍るつてのは、はて扨て情ない御事ぢや、うつかり女房は貰へんぞよ』
『大きな聲を出すと――』
『構ふものか、誰に聞えても――俺ア正當――間違のない所を云つてるんだい』
兵どもは、主君、淺井長政が、闇の情に引かれて、斷乎たる決意が出來ずにゐるとばかり、思ひ込んでゐた。

『織田からおいでの若奥方が、お美しいといふだけの理由で、朝倉館の大恩を、お忘れになるといふ滅茶が、あるものか無いものかッ！』
と、遠藤喜右衛門が、呶鳴つた。
兵だけではなく、歴々の部將どもが、城の内部で、喚き散らしてゐるのだつた。
いま馳せつけた騎馬注進の士は本丸の虞敷に出張つてゐる大殿、久政の前に、畏まつてゐた。
『手筒山の要害も、唯一日で攻め落されしのみならず――』
と、云ひも終はらぬうちに、
『うむ、金ケ崎もかッ！』
と、久政の聲が、震へた。
『はッ、仰せの如く！』
『すでに落城かッ！』
久政の顏は、怒りの朱を注ぐ。
『敵は雲霞の、三萬餘人――。景恒の殿いかに豪勇におはせばとて三千の寡兵を以つては防戰、成り難く、無念や、名城金ケ崎も、敵の手に奪はれまして御座りますッ！』
注進の報告によれば――

金ケ崎の城主、朝倉景恒は、手筒山の後詰めに、その精鋭の多數を死傷させ、越前隨一の闘將ながら氣は屈し、勢ひ挫けて、城を捨てたので、朝倉の防禦線の、第一線は、もはや破られ、織田軍は木ノ芽峠へ迫つた、といふ。

木ノ芽峠を越せば、朝倉館、義景の本城、一乘谷は、指呼の近くにある。

（もはや猶豫は、斷じて成らん！）

久政は、座を立つて、奥へ急いだ。

（三）

『市姫。――道理ぢや！　歎くのは道理ながら、泣けばとて、怎うなるものでなし』

と、長政がいつた。

美しい市姫の顏は、泣き濡れてゐた。

『それは解つてをりますけれど、わたくしは悲しうございまするものを？』

『お身が、どんなに悲しんでも、詮ないことだと申すのだ』

『詮ないと諦めてはをりまする』

『そんなら泣くな。泪を拭くが宜い。この長政も、出來るなら、織田と戰ふことは避けたいのだ。最愛のお身の兄者と、なんで干戈の間に相まみえたからうぞ？　しかし淺井は忘恩の譏りは、受けるに忍びないのだ。朝倉館に援けられた爲にこそ　今日の淺井はあり得たのぢや。朝倉殿の援けなくば、滅びたかも知れない。いや滅びる外無かつたであらう。してみれば朝倉殿の恩義に對しては、緣戚の誼も、犧牲にしなければならぬ。妻の情愛に引かされて、あれ見よ、大恩ある越前の危急を、餘所に――と、後ろ指を差されては、長政の男が廢る、淺井の弓矢の、名折れになる。すでに織田殿は、誓紙を反古にした』

長政が、さういつた時、急いで這入つて來た父、久政の、かなり興奮した眼が、鋭く市姫の姿を睨んで、

『えい見苦し！　何を泣く？　女は一度嫁せば、良人に從ふが習ひぢや。いはんや武門に生れた身がその愁歎は何事ぞ？　夫の家の人となれば、生れし家を忘るゝが、道ぢや、道ぢや！』

長政の側へ歩み寄つて、

『今、注進が參つたぞ』

『おう、何と？』

長政が、父の顏へ眼を据ゑると、